

底ん処をよろしく

登場人物

川島佳純（かわしまかすみ）……………大衆食堂「底ん処」の看板娘

川島隆三（かわしまりゅうぞう）……………大衆食堂「底ん処」の店主で佳純の父

坂崎栄介（さかざきえいすけ）……………元弁護士、フリーライター、

奥村三平（おくむらさんぺい）……………底ん処の常連客、以知子の亭主で無職

奥村以知子（おくむらいちこ）……………底ん処の常連客、三平の女房で美容師

田代麻衣（たしろまい）……………キヤバ嬢

細川亜矢子（ほそかわあやこ）……………底ん処の常連客、謎の美魔女？

村木信宏（むらきのぶひろ）……………底ん処の常連客、うだつの上がらない営業マン

日比野一樹（ひびのかずき）……………底ん処の常連客、工場勤務の青年

小原翔太（おはらしょうた）……………底ん処の常連客、工場勤務の青年

須藤弘庸（すどうひろのぶ）……………麻衣の元夫

舞台上手奥に厨房の入り口。その前に数脚の椅子とテーブル。曲が流れる中、定食屋・底ん処の日常風景。三平が定食を食べているテーブルでビールを飲んでいる翔太と一樹。別のテーブルで一人定食が出てくるのを待っている亜矢子。下手より、坂崎が入ってくる。坂崎を空いているテーブルに案内した後、厨房につながる小窓の前に置かれた小鉢を取って坂崎のテーブルに向かう。曲はずっと続いている。

三平 申し訳ないけど、俺若い頃彼女がいない時期なんて無かったからさ。

一樹 出ましたよ、三平さんの昔もてました自慢。

三平 いや、逆にお前らに聞きたい訳よ。何でそんなにもてないの？どうやった
らそこまで寂しい青春に耐えられるの？

翔太 何すかそれ、腹立つわ。

一樹 三平さん本当に昔もてたんですか？

翔太 そうっすよ、怪しいすよ。

一樹 若い頃つつても基本その顔でしょ。

三平 男は顔じゃないの。どこまで本気で女と向き合うか、それが全てなの。

一樹

じゃあ三平さん、俺マジで相談していいですか？

三平

おう、何だよ。

翔太

一樹、またあの話か？

男達の会話F.O

佳純

（亜矢子に）イワシの甘酢漬け、お待たせしました。

亜矢子

ありがとう佳純ちゃん。（イワシに手を合わせる）この艶、この香り。うーん、幸せ。

佳純

（亜矢子が手を合わせる様子に）亜矢子さんに食べられるイワシも、きっと幸せですよ。

亜矢子

そうかしら。（笑）

厨房につながる小窓のところに出没している小鉢を盆にのせ、舞台前に進む佳純。

佳純

いらつしやいませ。（客席最前列のお客にお客さんこの店初めてですよ。

良かったらこれ、味みてください。切干大根の煮物です。上品な料理じゃありません。大根は他の料理用に桂むきにした皮を使っていますね。でも本当に美味しいですよ。初めてのお客さんにはみんな食べて貰ってるんです。何て言うか、名刺代わり？（笑）栄養があつて美味しいものをうんとお安く出しますから、「底ん処をよろしく」って。

曲がFQ、佳純は客達の中に戻り、汚れた食器を持って厨房に。

一樹

ちゃんと聞いてます三平さん？

三平

聞いているよ。で、その合コンで会った女がどうしたって？

一樹

その子、仕事は保母さんなんすよ。あ、ほら、幼稚園で子供の世話をする、あれ。

三平

その説明いらから。

一樹

でも職業のイメージってあるじゃないすか。

三平

その保母さんがどうしたんだよ。

一樹

見た目は幼稚園の先生って感じじゃないんすよ。着てる物も結構今どきで。

翔太　ギヤルですよ、ギヤル。

一樹　うっせいな。

三平　翔太も一緒だったのか？

翔太　はい。ひどい女ですよ。

一樹　（翔太に）邪魔すんなって。三平にでね、その子俺に何だったと思います？

三平　何だったの？

一樹　最初の一言が、もし結婚したら、私の為にその山売ってくれますか？って。

三平　何、どういう事？

一樹　そのまんまっすよ。（すねたように料理をつまむ）

三平　え？

翔太　こいつその合コンで、実家は結構な広さの山林を持ってるって言っちゃっ

たんですよ。

三平 何でそんな事言っただよ？

一樹 だって女の子達が、男はみんな医者や弁護士だって聞いたから参加したの
について言うんですよ。

三平 は？

翔太 セッティングした奴に後で聞いたら、そうでも言わないと女の子が集ま
なかったらしいです。

三平 (笑)お前ら医者や弁護士って顔か。

一樹 分かってますよ。だから俺正直に言っただよ。俺達みんな仕事は板金工
です。毎日車の凹み修理してます。マジ毎日凹みっぱなしって。

翔太 こいつの持ちネタ。当然誰も笑いませんよ。冷たい零下五十度みたいな
空気が流れて「板金工さん、あつそう」みたいな。女は分かり易いです。

三平 それで実家の山の話か。

一樹

ええ。そしたらその子、山つてどれくらいあるの？土地にしたら東京ドーム何個分？売ったら遊んで暮らせる位あるのって、初対面でそんな事、普通言います？

三平

さすがに初対面でその台詞はないな。

一樹

言わないっすよね。

三平

まあ金が全てってタイプだな。当然スルーだそんな女。

一樹

出来ないっすよスルーなんて。

三平

どうして？

一樹

その子めっちゃ可愛いんです。

三平

は？

翔太

ね、馬鹿でしょこいつ。

三平

まさかその子に惚れたってか？

一樹

はい。この日比野一樹、生まれて二十数年間守り続けて来た男の純情を、
捧げる人をやっと思つけたつす。

翔太

よつ、チェリーボーイ。

一樹

あの子にフォーリンラブつす。

翔太

呆れるでしょ。

三平

一樹お前、そんな女のどこがいいんだよ？

一樹

ギャップつすよ。

三平

ギャップ？

一樹

俺には見えたんす。砂場で泥んこになつてる子供たちを優しく見守るあの
子の姿が。膝つ小僧を擦りむいて泣いてる子供に、大丈夫だよって言いな
がら傷薬を付けてやつてる姿も。だけど合コンで会った男なんかには簡単
に気を許さない。これでもかって位言いにくい事ズバズバ言うんすよ。本
音で生きてるつつうか、常に上から目線の話し方も、何かいいんすよね。
分かるっしょ？

三平

いやいや、分からないよ。

一樹

あのクールな見下し感が、俺の理想にピッタシなんすよ。

三平

どんな理想だよ。

翔太

色々言ってるけど、見た目に惚れてるだけなんですよ。若くてちよつと可愛いけど、ほんとビッチですよ。

一樹

翔太、黙ってろつて。

三平

その子はちよつとな〜。

一樹

だめつすか。俺、真剣に結婚も考えてるんすけど。

三平

結婚？

翔太

その合コン以来一度も会えてないし、貰ったメアドも嘘だったんですよ。

一樹

俺、もうこれらの幼稚園十か所位回りました。絶対探し出すつもりです。

翔太

山があるって話以外、見事に何も食いついて来なかった女ですよ。

三平 やっぱりその子はやめとけ、付き合ったら苦労するぞ。

一樹 若い時の苦労は買ってでもしろつて言いますよね。

三平 それ使い方間違ってるしな。

翔太 阿呆や阿呆や阿呆の見本や。〔笑〕

一樹 〔翔太の首を絞め〕さつきからうつせーんだよ。

翔太 堪忍、堪忍どすえ、

一樹 関西人か、

三平 〔笑〕もうやめろ、お前ら。

一樹 三平さん俺マジなんすよ。

三平 分かった分かった。

大笑いする三平と翔太、しゅんとする一樹。一人静かに食べている坂崎を見る佳純。

佳純

(三平達にちょっと、あんた達うるさ過ぎ。初めてのお客さんもおいでなんだからね。

三平

あゝ悪りい、悪りい、(坂崎に)すみませんね。

坂崎

あいえ。

三平

(一樹と翔太に)おい、お前ら、

一樹

(坂崎に)すみません。

翔太

すみません、どうも。

会釈で応える坂崎。

佳純

(坂崎に)ごめんなさい、うるさくて。

坂崎

大丈夫です。

佳純

ウチ常連さんがほとんどだから、みんなここを自分ちみたいにしてて。

坂崎 あの…。

佳純 はい、何か？

坂崎 あの、いきなりで恐縮なんですけど、

下手より突然入ってくる村木。うろたえた様子で隠れる場所を探すようにキョロキョロ。

村木 あゝ（空いているテーブルの下に隠れる）

三平 ムラ、

一樹 ムラさん何やってんすか？

佳純 村木さん、どうしたんですか？

村木 佳純、誰か来たら俺いないって言って。

佳純 え？

村木 頭のおかしな女に追っかけられてるんだよ。

一樹

女？

三平

お、何だよ色っぽい話か？

村木

冗談じゃないんだよ。

下手より、麻衣登場。

麻衣

ちよつと、

村木

うわつ、

三平

ムラ、

翔太

ムラさん、

麻衣

何だころみたいにそんな所に隠れてんのよ。

一樹

あ……。合コンで会った女と気づく。翔太もすぐに気づく

佳純

(間に入り)あの、

麻衣

(佳純に)どいて、

佳純

どうしたんですか？

麻衣

うっさいわね、関係ないでしょ。(村木に)あんた出てこなかったら蹴飛ばすよ。

翔太

一樹、

一樹

うん。

村木

(怯えて)お前、何だよ、頭おかしいんじゃないのか。

麻衣

おかしいのはそっちでしょ。

村木

冗談じゃないよ。いきなり人の事殴りやがって。

麻衣

あんたが約束破るからでしょ。

村木

意味分かんねえよ。

三平

ムラ、とりあえず出て来いよ。

村木

(恐る恐るテーブルの下から這い出しながら)そいつ押さえといてよ。まったく、人の頭ボカスカ殴りやがって。

麻衣

アンタのせいでいくら損したと思ってるの。

村木

知らないよそんな事。

三平

(麻衣に)あの、ムラ何かやったの？

麻衣

あんたこいつの友達？

三平

友達っていうか、顔なじみ。俺もムラもいつもここで飯食ってる常連だから。

麻衣

だったらあんたがお金払ってくれる？

三平

はあ？

佳純

村木さん、何があつたの？

麻衣

こいつ村木って言うの？(村木に)何が木村よ、嘘つき。

佳純

村木さん、

村木

この子、西口のビビットって店のキャバ嬢。俺が同伴の約束破ったって怒ってんだよ。

翔太

キャバ嬢…。

一樹を見る翔太。シヨックを受けている一樹。

三平

何だ、そんな事か。

麻衣

そんな事？ふさぎくんじゃないよ。同伴すっぱかされて、こっちは十二万も損したんだ。

三平

十二万？

佳純

（麻衣に）あの、同伴って？

チラリと佳純を見るが不機嫌そうに顔を背ける麻衣。

三平

こういう子が店の外で客と飯食ったりして、そのまま一緒に店に出勤する

って事だよ。店は客の囲い込みが出来て、客は女の子と店の外でデート気分が味わえるって訳。女の子には手当もついたりするしね。

佳純
そんなのあるんだ。

三平
でも、十二万ってのはちょっと、

麻衣
月に十五人の客を同伴したら十万の賞金。昨日は月末で丁度こいつが十五人目の客だった。それをすっぽかされて全部パー。おまけにこいつを待って一時間遅刻したから店のルールで二万の罰金、合計十二万の損害、ふざけないよ。

村木
行けたら行くって言ったただけだろ、何言ってるんだよ。

麻衣
あたし確認したよね、絶対来てねって。メールも送ったしあんたも返事をくれた。あんたが来ないんだったら他にもあてはあったんだ。ほら弁償しなさいよ。

村木
弁償って…たかがキャバ嬢との口約束、

麻衣
ちよつと、たかがって何？たかがキャバ嬢？

村木 …いや、だから…たかが、口約束じゃないか。

麻衣 あんたねえ、

坂崎 口約束でも、場合によっては賠償を命じられるケースもありますよ。

村木 え、

坂崎 要は、約束があつた事を証明出来るかどうかです。メールのやり取りが残っていたらそれは証拠になります。

麻衣 そうなの、ありがとう。（村木に）メールなら残ってるから。そっか、金払わなかったら裁判所に訴えたらいいんだ。

村木 馬鹿じゃん。十万位の金で裁判って、弁護士頼んで裁判したら費用とか期間の方がよっぽど大変だよ。

坂崎 今は三十万以下の請求なら少額訴訟って制度があるんですよ。原則一回の審理で即日判決、弁護士も必要ありません。だから費用は総額でも一万円前後かな。

村木 あんた誰だよ、弁護士でもなくせに偉そうに、

坂崎 いえ。今休職してますが、一応資格は。

麻衣 弁護士なの。

坂崎 (頷く)ただ、(村木に)あなたも殴られたんですよね。それについては暴行を受けたと訴える事も出来ます。

村木 あっ、そうだよね。頭何発も殴られたし、俺、恐怖で心ボロボロだし、慰謝料五、六十万貰ってもいいよね。

麻衣 何よそれ、

坂崎 いやそんなには請求出来ませんよ。見た感じキズも残っていないし、殴られた原因は貴方が約束を守らなかった事だしたら、せいぜい十萬位かな。

村木 何だ、そうなの。

麻衣 はあ？

坂崎 病院で診断書出して貰って、医療費の実費と一日分の給与を休業補償とし

て上乗せしたら、まあお仕事にもよりますが、トータルで十二、三万かな。

慰謝料つてもつと貰えないの？

馬鹿じゃ無いの、何で私があんたにお金払うのよ。

もし双方の言い分をお金に換算したら、どちらも十二、三万位。丁度お互いの請求を相殺できるような額に落ち着くって事です。だから、この件はもうこれで終わりって事でいかがですか。

(嬉しそうに) そうだね。しょうがない、それでいいよ。俺もちよつとは悪かったし。

(麻衣に) じゃあ君の方も、

ふざけないでよ。何適当に話まとめようとしてんのよ。こっちは実際に損害をこうむってるの。こんな商売してるからって嘘つかれて馬鹿にされて、黙ってられる訳ないでしょ。

ちよつと待てよ。

翔太、

村木

麻衣

坂崎

村木

坂崎

麻衣

翔太

三平

翔太

あんた、そんな偉そうな事が言えんのかよ。

一樹

翔太、いいよ。

翔太

良くねえよ。

麻衣

何あんた、誰？

翔太

憶えてもいないのかよ。

三平

翔太、どうした？

翔太

三平さん、この女ですよ、幼稚園の先生。

三平

え、

麻衣

幼稚園？…あ、

翔太

あんただって、俺達が「たかが板金工」だから適当にあしらったんだろ。

麻衣

そっか、あん時の…あのね、悪いけど今取り込み中。僕ちゃん達に付き合

ってる暇ないの。

翔太 ふざけんな。何が幼稚園の先生だよ。仕事もメアドも全部嘘。それで人には、嘘つく奴は許せないってか。

村木 あのだうなってるの？

麻衣 あくめんどくさ。いいよ、相手してやるよ。でもこっちの話がついてからにしてくれる。見ての通り今忙しいから。

翔太 それあんたの都合だろ。

麻衣 …あのね、私あん時もこんな恰好してたよね。こんな恰好のこんな喋り方の女が幼稚園の先生って、それ信じる方がおかしいと思わない？そっちが最初に医者だ弁護士だって嘘ついたからこっちも洒落でそう言うただけでしょ。まさか信じるなんて思ってたわいだよ。

翔太 世の中にはそれを信じる馬鹿な男だっていんだよ。この一樹はな、

麻衣 いい加減にしてよ。あんた達あの時何か損した？実害あった？女の子とお酒飲めて楽しかったんでしょ。こっちは忙しい中、くそ面白くもないあんた達に付き合ってたのよ。

翔太

何だよその言い方は。この一樹はな、

一樹

翔太、

翔太

こいつは頭悪いし全然もてないけど、本気で彼女を作ろうって、あの合コンに真面目に参加してたんだ、そんな気持ち踏みにじりやがって。

麻衣

あくもう何これ。いい、こっちは生活掛ってんの。あんた達の青春の思い出作りに付き合ってる暇は無いの。あの合コンだつて少しでもましな客を開拓しようと思つて参加したのに、何板金工って。

翔太

…あんた、最低のビッチだな。

麻衣

ビッチで結構。分かつたら邪魔しないで引つ込んでてよ。

翔太

あんたのせいで、一樹は今宿無しだよ。それでも実害無かつたって言えるのかよ。

麻衣

何言ってるの？

一樹

翔太、もういいって。

翔太　こいつはホント、ホント馬鹿だからあんたが言った事を真に受けて、家に帰って親父さんに頼んだんだよ。

麻衣　何の話？

翔太　あんた山売ってこいつに言ったじゃないか。だからこいつは親父さんに「親父が死んだらどうせ自分が受け取る事になる遺産、今の内に貰えないか」って言っちゃったんだよ。

麻衣　はあ？

三平　一樹、本当か？
(小さく頷く一樹)

翔太　「好きな子が出来たから山売って金に換えたい、頼む」って、そう言ったとたんに親父さんは激怒だよ。

三平　馬鹿だね。

翔太　馬鹿だよ。馬鹿だけどき、こいつはそんな位本気であんたを好きになって、あんたが言った嘘を信じて、ここら中の幼稚園回ってあんたを探してたんじゃないか。

麻衣

…え。

三平

何か馬鹿すぎて、格好良いよな、悪いよな。

翔太

家も追い出されて、こいつ今は俺んところに居候だよ。これでも実害無かったって言えんのかよ。

麻衣

…。

一樹

翔太、ホントにもうやめろって。(麻衣に)あの、気にしないでいいからね。こいつちよつと大げさに言ってるから。ていうか、こいつが言ってる程、俺本気じゃなかったし。うん、

翔太

一樹、

一樹

こっちはホント何も問題ないんで、あの、どうぞ、そっち(村木)の問題に集中して頂いて、

村木

え、(こっちに振らないでよ)

麻衣

…。

(俯く麻衣。静かになり、気まずい雰囲気)

亜矢子

佳純ちゃん、

佳純

はい。

亜矢子

お茶、貰える。

佳純

あ、ごめんなさい。(急須を取りに行き、亜矢子のお茶を足す)

亜矢子

何か、変な雰囲気になっちゃったわね。

佳純

うん。

村木

(麻衣に)…あの…俺、悪かったよ。十二万はちよつと無理なんだけど、せめて昨日の埋め合わせ位だったら、

麻衣

もっいいい。

村木

え？

麻衣

もう、いいから。

村木 本当に、いいの？

麻衣 (小さく頷いた後、一樹と翔太に) …合コンの件は、ごめん。私もいろいろ上手く行かない事があって、ちょっと焦ってたから。

顔を見合わす佳純と亜矢子。一同の表情が明るくなり、場の空気が和らぐ。

佳純 …(麻衣に)何か、食べます？

麻衣 え？

佳純 ていうかウチ、一応食堂だし。

麻衣 …ああ…でも、そろそろ行かなきゃ。

佳純 日替わり定食だったらすぐに出せるし、今日のはお勧め。

三平 旨いよ、ここの料理は。

亜矢子 美味しいわよ。

佳純 食べてって。

麻衣 …じゃあ…その日替わりを。

佳純 ちよつとお待ちください。

厨房に向かう佳純。厨房の中から盆に定食をのせた隆三が出て来てぶつかりそうになる。

佳純 何、父さん、びっくりするじゃない、

隆三 日替わりだ。

佳純 え、何で？

隆三 いいから出せ。

佳純 うん。

佳純が定食の盆を持って麻衣の席に。しばらく様子を見ているが、厨房に消える隆三。

佳純 お待たせ。

村木 早や、

佳純

茄子味噌炒めと鯖の塩焼き。小鉢のおカらは、特に自慢の一品。

亜矢子

このおカらはね、これがおカラ？って言う位しつとりしててホント別次元でも佳純ちゃん、何でこんなに美味しいの？

佳純

高い材料は使えないけど、出汁だけはたっぷり、鰹も昆布もいいもの使って丁寧に仕込んでるから。

三平

この茄子味噌ね、ここの野菜はほとんどがそうなんだけど、茄子もこだわりの地元産。(佳純に)だよな。

佳純

うん。

三平

何つつても味噌が違うよ。これまた自家製で絶品なんだよ。

佳純

三平さんゴメン。味噌は自家製じゃなくて、知り合いの農家で作ってる田舎味噌。少しだけウチで白みそを合わせて、

三平

こまかい事はいいんだよ。とにかく旨いんだ。食ってみな。

村木

あの、俺も一言言わせて貰っていい？シンプルな焼き魚だってここを出し

てる物にハズレは無いよ。

佳純

父さん、魚にしてやれることはそんなに無い。魚料理は素材、鮮度が命だから仕入れは料理人の戦だった。

麻衣

…そうなんですか。

佳純

どうぞ。

箸を取る麻衣。皆の視線が麻衣に注がれる。翔太と一樹だけが少し離れて見ている。麻衣、顔を上げ、自分に注がれている視線に食べる事を一瞬ためらう。

佳純

あ、ごめんなさい。(三平や村木を咎め) ほら、

一同、麻衣から離れ、一旦そっとしておく素振りも、すぐに振り返って麻衣を見る。静かに食べ始める麻衣。

麻衣

…これ…美味しい…美味しい。(箸を進めるが、やがてすすり泣き)

佳純

え？

三平

(小声で佳純に) どうしたの？

一同、驚いて互いに顔を見合わす。

佳純 あの、

麻衣 …ごめんなさい。

麻衣、立ち上がり、バッグから財布を取り出し千円札を一枚テーブルに置く。

佳純 え？

麻衣 ごめんなさい。(小走りで、下手の出口に向かう)

佳純 ちよつと待って。

一同、いなくなった麻衣の後ろ姿に困惑。

三平 何だ？どうなってるんだ？

翔太 一樹、

いきなり走って麻衣の後を追う一樹。転換明かり。

時間の経過があり、その日の夜。テーブルの上を片付ける佳純。厨房から登場し、少し離れ、椅子に座る隆三、片手で自分の肩をもむ仕草。

佳純

さっきはびっくりよ。父さん日替わり持って立ってんだもん。何？注文があるって分かったのって思っちゃった。(笑)

隆三

…。

佳純

お兄ちゃんのお供え用だったとはね。自分で持って行くとしたのは、私にやらせるのが照れ臭かったからでしょう。

隆三

…たまたま手が空いたから、そうしようとしただけだ。

佳純

(笑)素直じゃないね。いつもは何でも私にやらせるくせに。

隆三

半人前のくせに役に立っているつもりでいるから、いつまでたっても成長しない。

佳純

ひどい。だったら私に厨房やらせてよ。

隆三

何度言ったら分かる？女に包丁を持たせる訳にはいかないんだ。

佳純

だからそれいつの時代の話よ。

隆三

時代じゃない、ウチのしきたりだ。

佳純

こんな店が老舗の高級割烹みたいな事言ったら笑われちゃうから。

隆三

心意気まで店の間口に合わせてしまったらおしまいだ、それが爺ちゃんの口癖だった。

佳純

(小声で)還暦とつくに過ぎてるのに、まだ親離れてないって、

隆三

何だって？

佳純

何でもない。じゃあ、跡取りもないし、この店は結局父さんの代でおしまいということね。

隆三

お前が婿でも取れたら別だがな。

佳純

おあいにく様。そんなハードル上げなくても、普通に嫁に貰ってくれる人もないんだから。

隆三

情けない奴だ。

佳純　でも父さん、定食のお供えをしたって事は、もうお兄ちゃんを赦したって事よね。

隆三　赦すとか赦さないとか、そういう事じゃない。しきたり通りにしただけだ。

佳純　しきたり？ 命日にその日の日替わり定食を仏壇に供えて欲しいっていうのは、お爺ちゃんの遺言でしょ？

隆三　爺ちゃんの遺言は、この家のしきたりだ。

佳純　じゃあ私が死んでもそうするの。

隆三　（振り向き、佳純の顔を見て） お前も親より先に死ぬつもりか。だったらそうしてやる。

佳純　可愛くない。

隆三　∴。

佳純　ね、そろそろお兄ちゃん納骨してあげてもいいんじゃない？

隆三

∴。

佳純

だってせっかくウチのお墓があるんだもん。お兄ちゃんだって、毎日不機嫌そうなお父さんの顔を見てるより、お母さんやお爺ちゃんと一緒の方が嬉しいと思うよ。

隆三

∴。

佳純

お兄ちゃん死んじゃったのよ。亡くなった人をいつまでも責めてどうするの？

隆三

別に責めちゃいない。あいつはああいう子だった、そう思ってるだけだ。

佳純

それって責めてるって事じゃない。

隆三

違う。

佳純

じゃあ何なの？お父さんが何考えてんのか分かんないと、私も娘としてどうしたらいいのか分かんない。

隆三

お前に何かして欲しいなんて言っただけだし、父さんが何を考えてるかなんて、お前が知る必要も無い。

佳純 何それ、ホント酷い事言うよね。私ぐれちゃうからね。

隆三 ぐれる歳か。

佳純 全く。あゝつくづく悔しいな。私もお兄ちゃんみたいにもっと親に心配させたら良かった。

隆三 娘なのにその器量だ、生まれた時からずっと心配させられてる。

佳純 あのですね、言つときますけど、顔は父さんに似てるって言われてるんです。少しは責任感じて頂けます？

隆三 (立ち上がり) 明日も早い、もう寝るぞ。

厨房に向かう隆三。

佳純 何、逃げるの？ちよつと、父さん、

隆三を見送った後、しんみりとする佳純。

佳純 (独白) …お兄ちゃん、ずるいよ。親に心配させるだけ心配させて、あつと

いう間に死んじゃって…なのに父さんの頭の中は、今もお兄ちゃんの事ばかり…。

— 暗転 —

暗い中に三平の下手な歌が聞こえる。

三平（歌）

行儀良く真面目なんてできやなかったら、夜の校舎窓ガラス壊して回った、

明るくなり、翌朝の底ん処。舞台中央の三平、厨房の中の佳純に向かって話している。

三平

って、歌詞のまんまだもん。二中の一階の窓ガラスで割れずに残ってたのは一枚も無かったつうから、まゝ輝の奴、派手にやったもんだよ。だけどさ、お前のせいだって親父さんに怒鳴られた俺としては、えっ何で何で？って感じよ。

佳純

（前掛けの紐を結びながら、厨房より登場）まあ確かに、三平さんとお兄ちゃん、お兄ちゃんが尾崎豊を聴いてたっていうのは関係無い話だとは思っけど、それまでのお兄ちゃんが真面目すぎる位真面目だったから、父さんも何が何だか分からなかったのよ。

三平 確かにガキの頃俺の後にくつついて遊んでた輝は、泣き虫だったけど素直な子だった。

佳純

父さんは、むしろ私の方を心配してた位だし。

三平

お前はさ、見てくれも性格もまるつきり男だったもんな。今も大して変わってないが。

佳純

うるさい。

三平

親父さん、男手一つで良く頑張ったとは思うけど、何とも不器用な性格だからな。

佳純

お兄ちゃんが問題起こす度に父さん大声で怒鳴って、話も聞かずに殴ってそれに反発したお兄ちゃんがまた問題を起こして、毎日その繰り返しだった。正直、お兄ちゃんが家出した時にはホッとしたもん。

三平

俺は感心してたんだよ。家の中があんだけ荒れてんのに、お前はよくまともでいられたなって。

佳純

女は男と違ってどんな時でもちゃんと人生の損得勘定がち出来るのよ。

三平

あゝそれは間違いない。

佳純

だけど…やっぱり父さんはお兄ちゃんの事をずっと引きずってるみたいだし、多分そのせいだと思うけど、お兄ちゃんのお骨をお墓に入れようとならないんだよね。

三平

そっか。だけどそこは、亡くなっちゃったらみんな仏様だよって、親父さんにそう言つて聞かせるしかないんじゃないの。

佳純

それは何度も言つたの。だけどその度に「そんな事は分かつてる」って生返事。

三平

親父さん、何に拘ってるのかな。やっぱりあれか、輝の最期があんなだったから…。

佳純

私にも分かんないの、父さんが何を考えているのか。

三平

良い方に考えたらいんだけどな。少なくとも輝はもう死んじまつて、この先悪さをする事も出来ないんだから。(笑)

佳純

…。

三平 あ、わりい。俺ちよつと遠慮無しに言い過ぎたか？佳純がしつかりしてるから、つい。

佳純 平気よ。

下手より、坂崎登場。

坂崎 あのだ…ごめんください。

佳純 いらつしやいませ、あ、

三平 あれ、あんた昨日の、

坂崎 あっ…はい、

三平 確か、弁護士先生？

坂崎 …ええ。

佳純 今日もいらして頂いたんですね、ありがとうございます。ただ、まだ営業時間じゃないんですよ。

坂崎

…ですよ。

三平

あ、俺はね、ここの家族みたいな者だから。

佳純

（坂崎の何か言いたげな様子に気付き）あ、何か？

坂崎

あいえ、昨日食べた大根とゴボウのきんぴらがあんまり美味しかったから、

三平

それでわざわざ、こんな早くから？

坂崎

あの、ご主人は？

佳純

父は、仕入れに。もうすぐ戻ると思いますが。

坂崎

こちらの娘さんですか？

佳純

ええ。

坂崎

そうですか。

三平

あの、俺おたくにちょっと聞きたいことがあんだけど。

坂崎
はい？

三平
おたく、弁護士さんだったら、警察に捕まった人間とか、その家族とか、
いっぱい見て来てるよね。

坂崎
え？

佳純
三平さん、何言ってるの、

三平
（佳純に）いいから。（坂崎に）中には事件そのものは片が付いた後も、罪
を犯した身内を、受け入れられない家族もいたりするよね。

坂崎
はい。

佳純
三平さん、

三平
（坂崎に背を向け、小声で）佳純、こういう事はやっぱり専門家の意見を
聞くのが一番だと思うよ。

佳純
だからってお客さんにいきなり、

三平
昨日、お前も見тар。この人はさ、あん時ムラとあのキャバ嬢の喧嘩を収

めようとしてあんな事言っただよ。金にもならないのにクビ突っ込んで根っからの弁護士さんなんだよ。

佳純

だからって、

坂崎

あの、

三平

あくわりいわりい。これね、特定のどつかの家族とかの話じゃなくて、あくまで一般論なんだけど、

坂崎

はい。

佳純

（小声）何が一般論よ。

三平

例えば、男手一つで育てた息子が、ぐれて道をそれてしまったとするわな。

坂崎

…はい。

佳純

まんまじゃない。

三平

ちよつと重い話だし、法律の相談とかでもないんだけどね。

坂崎

ええ。

三平

でそのぐれた息子が傷害事件を犯して服役する。刑期は多分三年位かな。父親は曲がった事が大嫌いな人間だから息子が許せない。当然面会とかも自分が行かないだけじゃなくて、家族が行く事も許さないんだよ。その内に服役中の息子が病気になるって病院に移されたって知らせが届くんだが、意固地な親父はやっぱ息子に会いに行こうとはしない。そして娘にも、

佳純

ちよつと、

三平

あいや、家族にも絶対に行っちゃならないと言う訳よ。

坂崎

はい。

三平

息子は三十代、まだまだ若かったし、親父さんも家族も息子の入院をそれ程深刻には考えていなかったんだ。ところが、暫くして、いきなり訃報が届くんだよ。つまり、息子が病気で亡くなったって。

坂崎

…そうですか。

三平

まあこれが粗方の話。でその、何だよ、当然、何をどうしたって死んだ息子に戻ってこないし、残された家族は元気に生きて行くしか無い訳だけど、

この親父さんがいつまでも息子の事を引きずってるようで、元気もない。そんな場合、この心のケアというか、何かアドバイスをするとしたら…。

坂崎

アドバイスですか。

三平

うん。まずね、この親父が何考えてんのか分かんねえんだよ。息子の命日に定食の供え物はするが、骨はいつまでも墓に納めないとか。

坂崎

定食？

三平

あ、それは何でもない。

佳純

まったく。

三平

とにかく、似たようなケースで今はみんな元気にやってるよ、みたいな話、どっかで見たり聞いたりした事ないかな。

坂崎

…すみません、そういう話は…。

三平

無い？

坂崎

ええ。

三平

何だ、無いのかよ。

佳純

三平さん、失礼よ。

三平

だってさ、先週観たドラマの弁護士なんて、貧しさ故に罪を犯した親子を助けて、何年も心の支えになつてやつてさ。

坂崎

あの、実際の弁護士は法律の文言に縛られた窮屈な仕事です。抱える案件が多くなると人情とか心の機微とかつていうのは、一番最初に切り捨てる事が求められます。

三平

寂しい話だね。

佳純

もう、三平さんったら。

下手より、以知子登場。

以知子

やっぱりここだ。

三平

あ、

以知子

あんた朝っぱらからフラツと出たつきり、こんな所で何やってんのよ。

三平

いや俺は、いつもお客さん用に買ってる雑誌が今日発売日だからさ、少しでも早くと思つてコンビニに行ったんじゃないの。そしたらまだ来てないつうからさ。

以知子

(レジ袋に入つた週刊誌これ何？

三平

あれ、もう来てた？

以知子

朝刊と同じ時間に届いたつてさ。

三平

そうなの？俺聞いたら無いつうから。そつかくバイトの店員はいい加減だな。

以知子

あのね、いくら髪結いの亭主つてご身分でも、開店前に店の表を掃き掃除位しても罰は当たらないのよ。

三平

勿論だよ。

佳純

以知子さん、ごめんなさい。私もちよつと相談にのつて貰つたりして、三平さんを引き止めちゃつたから。

以知子

あく佳純ちゃんのせいじゃないのは分かってんのよ。でもさ、昼も夜もここでご飯食べてんのに、まだ足んないのかね、この人は。

三平

俺、先に帰って、店の前ピカピカに磨き上げとくからよ。

以知子

ちよつとあんた。

三平

お前は、ゆつくりしてくればいいよ。

以知子

何言つてんの、ちよつと待ちなさいよ。

三平

じゃあ佳純、また後でな。(下手に退場)

以知子

まったく。バツが悪いもんだから、逃げちゃったよ。

佳純

ごめんなさい。

以知子

だからいいって。ここのお陰で私も助かってるんだから、ホントよ。

佳純

そう言つて貰えろと。

以知子

あんなんでも一応亭主だからさ、ご飯食べさせない訳にもいかないでしょ。だけど私は店が忙しくてそんな暇ないし、あの人が自分で料理したら一番いいんだけど、とにかく一人じゃ何にも出来ない人だから。

佳純

三平さん、昔から面倒見が良くてみんなに慕われてるのに。

以知子

私もね、そんな外面に欺されちゃったのよ。

佳純

もう。(笑)

坂崎

あの、

佳純

あ、はい、

坂崎

私、また後で…。

佳純

あ、済みません。父、もう戻りますけど。

坂崎

いや、出直しますよ。

佳純

そうですか。

坂崎 あのと、ご主人と少しお話し出来る時間、お店が比較的暇になる時間帯は？

佳純 ……大体、三時過ぎから四時頃です。

坂崎 じゃあ、その頃に。

佳純 あのと、父に何か？

坂崎 ……そうですね。あのと、私、坂崎といいます。訳あって弁護士は休職中なんです。それで暇してたら、出版社に務めてる友人が雑誌の記事を書かないかって、紀行文とか、食べ歩きの話とか頼まれました、まあライターの真似事って感じで。

佳純 じゃあ、それで、

坂崎 はい。昨日のきんぴら、茄子の葱味噌はさみ揚げ、焼き魚、どれも絶品で、

佳純 ありがとうございます。

坂崎 料理だけじゃなくて、お店の雰囲気もとてもいいので、ご主人にお話を聞けたら何か書けるんじゃないかと思ひまして。

以知子

ちよつと佳純ちゃん、いい話じゃない。お店の宣伝になるわよ。

佳純

うん。

坂崎

あの、すみません。本職のライターじゃないので、実は、書き上げても実際に記事になるという保証はないんです。いや、むしろボツになる可能性の方が高いかも知れません。

以知子

でも、もしかしたら雑誌に載るんですよ。いいじゃない。ねえ佳純ちゃん。

佳純

うん。（坂崎に父に伝えておきます。

坂崎

そうですか。じゃあ、よろしくお願いします。

以知子

ここホントにいい店だから、是非、いい記事書いてあげて。

坂崎

あ、はい。じゃあ、また後ほど。

佳純

よろしく願います。

会釈をして下手に退場する坂崎。坂崎の後ろ姿を興味深げに見送る以知子。

以知子　ねえ佳純ちゃん、あの何、本職は弁護士なの？

佳純　そんな話よね。

以知子　ちよつと、感じのいい人じゃない。

佳純　そうね。

以知子　そうねじゃなくて、佳純ちゃんあんた、頑張ってみたら？

佳純　はあ？

以知子　はあつて、まともな男との出会いなんて皆無に等しいこの環境に、突然現れた王子様かもよ。

佳純　以知子さん、もう何言ってるの。

以知子　佳純ちゃん、あんたこういう事にうと過ぎなんだから。分かってる？恋愛とか結婚とかちゃんと考えなかったら、この先お父さんの面倒見るだけの人生で終わっちゃうわよ。

佳純　はいはい。そんな事より、私やつぱり、父さんの事が心配になってきた。

以知子

佳純ちゃん、

佳純

父さん、取材とかちゃんと受けられるかな。

以知子

何、どういう事？

佳純

とにかく近頃不機嫌なのよ。まともに人と話そうとしないし、

以知子

そうなの？

佳純

どうしよう。せめて失礼な事言ったり、変な所で切れたりしなきゃいいんだけど。

以知子

それは無いんじゃない。いくら隆三さんでもお店の宣伝になるかも知れないんだもん、案外満面の笑顔で対応するんじゃないの。

佳純

そんな事あったら奇跡よ。

転換明かり。厨房に退場する佳純。下手に退場する以知子。入れ替わりに下手より登場する坂と隆三。壁に掛けられた額縁の写真を見ながら話している。

隆三 この写真、これもう七十年前だよ。親父が商売を始めた頃のこの店だ。

坂崎 七十年前ですか、歴史を感じますね。

隆三 まあ、それなりの意味は有るよね。(二人とも椅子に座る)旨いもまずいも大衆食堂の味は、その店の成り立ちから今日に至るまでの時間の積み重ねだから。

坂崎 なるほど。

隆三 この店が出来た時は、バラック建ての、そりゃあみすばらしい店だったんだよ。雨漏りはするし、隙間風は入るし、だけど親父言ってたよ。そんな時がそれまでの人生で一番嬉しい時だったって。

坂崎 そうなんですか。

隆三 (立ち上がり、写真を壁に戻し) 佳純、お茶まだか。

佳純 はい。(厨房から登場)奇跡が起こった。

隆三 何か言ったか？

佳純

ううん、何にも。（お茶を出し）どうぞ。

坂崎

どうも。

隆三

とにかく店の構えはボロボロだし、集まってくる客も金のない連中ばかりだった。だから親父は、どん底の底って意味で、店の名前を「底ん処」ってつけたんだ。

坂崎

ああ、そういう意味だったんですね。

隆三

空襲で焼け出された家族、職の無い帰還兵、腹を空かした戦災孤児、そんな連中が、飯だけは腹いっぱい食えるようにって、親父はそう思ってた。この店を始めたんだよ。

坂崎

立派な方だったんですね。

隆三

まあ上品な人間じゃなかったけど、志は高かったのかな。だけど、その頃食材は配給制だし、闇市で出回っているものは高くて手が出なかった。だから野菜なんかは山で採って来た山菜ばかりだね。

坂崎

じゃあ、ワラビとかゼンマイとかですか？

隆三 うん。そういう一般的な山菜は勿論なんだけどね…あ、ちょっと待って貰
つてもいいかな？

坂崎 ええ？

隆三 その頃の献立を、親父が帳面に残してるんだよ。あ、それとも、そんなの
見てもしょうがないかな？

坂崎 いえ、是非拝見させて下さい。

隆三 そうかい、じゃあ、すぐに取ってくるから。(住居に)

佳純 (隆三が行ったのを確認して) あ、坂崎さん。

坂崎 はい。

佳純 べ迷惑じゃないですか？父の話、ちょっと脱線気味で。

坂崎 いえ、とんでもないです。

佳純 有名なお店ならともかく、こんな店の昔話を聞いても、記事にも出来ない
んじゃないですか？

坂崎 佳純さん、私は、有名無名、お店の格式なんて関係無いと思うんですよ。

佳純 でも、

坂崎 昨日こちらで戴いた料理はどれも本当に美味しかった。一皿一皿に心が籠もっていて、寸分の妥協も無かった。お父さんは本物の料理人です。

佳純 ……ありがとうございます。

坂崎 きつと、この仕事の神髄みたいなものを、ご存じなんですよね。

佳純 そんな大げさな事じゃ、

坂崎 でも、私はプロのライターじゃありませんから取材のセオリーも知りません。言うなればアマチュアがプロと対峙して記事を書く訳です。だから、情報はたくさんあった方がいいと思うんです。

佳純 ……ええ。

坂崎 たくさんお話を聞いて、お父さんが大切にして来られた事、この店がずっと守り続けて来た事を、そのまま書いたら、何だか良い記事になりそう

な気がするんですよ。

佳純

…ありがとうございます。

隆三

これだ、これだ、（古いノートを数冊持つて登場）お待たせ。ちよつと目通してみてよ。

坂崎

はい。

隆三

山菜はね、例えば（ページを開き）これ、藪カンゾウの酢味噌和え。

坂崎

ヤブカンゾウ？

隆三

うん。百合の仲間だよ。新芽や花を食べるんだ。おひたしにも出来るし、味噌汁の実にもなる。（またページを捲り）で、同じ味噌和えでもこっちはノビル。（ページを更に捲り）そんでほら、ツワブキの煮物なんてね。

坂崎

名前も知らないものばかりですね。

隆三

そうかい。（別のノートを）魚だつてフナやドジョウはいい方で、ほら、カエルやザリガニまで、裁き方をこうやって描いてるだろ。親父は何でも店に出したんだ。

坂崎

店の料理としてカエルやザリガニを出したんですか？

隆三

そうだよ。まあ終戦直後の一時期だけだね、でもさすがにそんな料理を出す店、ゲテモノ屋なんて揶揄する連中もいたらしい。

坂崎

でしょうね。

隆三

でもね、親父は言ってた。普通の料理を、ちゃんとした料金払って食える客はよそで食ったらい。ウチに来る、その日の宿も無いような客にはまともなお足は払えないから、材料に金もかけられない。だけど、味は工夫次第だ、いくらでも良くしてやる、そう思ってたつて。

坂崎

素晴らしいですね。

隆三

さすがに、今はそんな材料を使う必要は無いけど、親父が残したその心意気だけは、忘れちゃならないって思ってるんだよ。

坂崎

しっかり受け継いでいらつしやいますよ。だからあんなに旨いんですね。

隆三

(ページを捲り)お、これはムカゴ飯だ。

坂崎

ムカゴ？

隆三

ムカゴは旨いよ。自然薯のツルから出た小さな芋だよ。根つこの山芋は勿論こちそうだが、葉っぱの付け根辺りに豆みたいなお小さな芋がつくんだ。

隆三の説明が続く中、照明変化し、離れて二人を見守る佳純が浮かぶ。

隆三

炒って塩を一振りしたら酒のつまみにもなるし、米に炊き込んだらホクホクのムカゴ飯にもなる。山の珍味だよ。

坂崎

聞いてるだけで、美味しそうすね。

— 暗転 —

明るくなり、定食の前に手を合わせている亜矢子。隣のテーブルの席に座っている佳純。厨房の隆三に聞こえないように話す佳純と亜矢子の会話。

亜矢子

頂きます。（一口食べて）うん、美味しい。で、その後、どうなったの？

佳純

とにかく、くだらない昔話の一つ一つに、へーそうなんですか、すごいですねーって、坂崎さんホント聞き上手だから父さん話が止まらなくなっちゃって、その内にお酒まで飲み始めちゃって。

亜矢子

お酒？

佳純

あんまり飲めないんですって言ってる坂崎さんにまで、まあそう言わずにつて、

亜矢子

懐かしい話が出来て、隆三さんよっぽど嬉しかったのね。

佳純

そりゃあ私だって、久しぶりに笑ってる父さんを見て嬉しかったけど…。

亜矢子

けど？

佳純

その内にだんだん切なくなつて来ちゃって…。

亜矢子

どうして？

佳純

父さんだってそんなに飲めないのよ。だから飲めない二人が杯二つ並べて、父さんは坂崎さんに、もつと飲みなよ、なんて言いながら楽しそうに話してるの。それ見てたら、父さん、死んだお兄ちゃんともあんな風に話しかったのかなって思っちゃって…。

亜矢子

…そういう事。

佳純

お兄ちゃん、おかしくなったのは高校受験の前頃だったの。だけどそれまでは、将来は自分も料理人になるって言ってたし、よく厨房にも入って父さんの仕事も手伝ってたし。

亜矢子

…そう。

佳純

…あゝやだやだ。何かしんみりしちゃった。ただの焼き餅かな。私だって一生懸命やってるのに何よ、娘じゃ駄目なのって感じ。(笑)

亜矢子

佳純ちゃん、頑張りすぎないのよ。

佳純

大丈夫、言うほど頑張ってないから。(笑)

下手より、翔太登場。

佳純

いらっしやい。

翔太

(元氣なく)ちわ。(上手寄りの席に着く)

佳純

何にする。

翔太 …日替わりで。

佳純 まいど。(厨房に向かい)日替わり一つ。

亜矢子 元気だった？

翔太 …はあ。

下手より一樹登場。

佳純 いらつしやい。

一樹 (翔太を見た後、小さくちわ。(入り口に近い翔太と離れた席に座る))

佳純 ……何にする。

一樹 …日替わりで。

佳純 まいど。

翔太 佳純さんごめん、日替わりやめて茄子味噌炒めで、

佳純 了解。じゃあ日替わり一つはそのままって事にして、茄子味噌炒め追加って事で。(厨房に) 茄子味噌炒め。

翔太 あの佳純さん、

佳純 何？

翔太 そっちの客の注文関係無いから、俺の日替わりをキャンセルして茄子味噌炒め定食に変更して貰えますか。

佳純 え？…(亜矢子と視線を交わし)…分かった。ちょっと待っててね。

厨房に入るふりをして、暖簾の間から顔を覗かせている。

亜矢子 (翔太に) 何かあったの？

翔太 別に。

亜矢子 (一樹に) どうしたの、何かあった？

一樹 …何も。

佳純

えっと、翔太君の日替わりをキャンセルして茄子味噌炒めに変更しました。
あと一樹君は日替わり定食よね。

頷く翔太と一樹。

亜矢子

（佳純に）若いときって色々難しいのよね。

佳純

（小声）ですね。

三平（SE）

一つだけ分かったこと、

亜矢子

中年は分かり易い。

三平

この支配からの（登場）卒業。

佳純

いらつしやい。

三平

ウッス。（一樹に）おっ今日は一人か。（同じ席に座る）お前何頼んだ？

一樹

日替わり。

三平

じゃあ、俺は…（翔太に気づき）あれ？翔太お前何やってんだ。こっち来い

よ。

翔太

いや、ここがいいです。

三平

馬鹿、何言ってるんだよ。こんな狭い店で相席しなかつたら立派な営業妨害だぞ。

翔太

∴。

三平

お前ら、どした？何かあったか？

亜矢子

（一樹に）あったのよね。

一樹

∴。

村木

（下手より登場）こんちわ。

佳純

いらっしやい。

村木

日替わりひとつ。

佳純

まいど。（厨房に）日替わり一つ追加。

村木

(翔太が離れて座って居るのを見て)ここ(三平達の席)空いてる?(誰も返事しないが勝手に座り)一樹、今度会社の同僚連れて行くからって、麻衣ちゃんにそう言つといて。

三平

ん?

一樹

ムラさん、

村木

いや、十二万にはほど遠いけど、せめてそんな位の埋め合わせはするからって。

一樹

だからムラさん、(その話は×の意

三平

ムラ、十二万って、この間のキャバ嬢の話か?

村木

うん。昨日久しぶりに行ったんだよ。一応ちゃんと謝つとこうって思つてさ。そしたらこいつと会つちやつて。

三平

一樹 お前まだあの子に、

一樹

いや、俺はただ…あの時、何か様子が気になったから…。

翔太

気になったから馬鹿みたいに毎日通って、金を貢いでんだよな。

亜矢子

（一樹に）本当なの？

佳純

一樹君、

一樹

…毎日じゃ、ないですよ。

翔太

この一週間残業で抜けられなかった一昨日以外、毎日だよ。

一樹

お前に関係無いだろ。

翔太

一樹、また言ったな。俺はお前と関係無いのか…そうか。

亜矢子

ちよつと二人とも、

翔太

分かった。じゃあホントにこれつきり友達でも何でも無いから。

一樹

いいよ。

三平

おい、

翔太

じゃあ俺のアパートからも出て行けよ。

一樹

出て行くよ。

三平

やめろつて。

翔太

馬鹿じゃないのか。給料前借りまでして女に貢いでる奴が、俺んとこ出てどうやって生きて行くんだよ。

亜矢子

え、

佳純

一樹君、本当なの？

三平

お前、そんな事してんのか？

一樹

…。

翔太

分かんないのか。あんな女、金があるうちは愛想良くても、金払えなくなったら会ってもくれないよ。

三平

翔太、もういいだろ。一樹、俺も翔太の言う通りだと思っよ。

翔太

…。

村木

あの…。

佳純

村木さん、もう余計な事言わないのよ。

村木

ゴメン。でも金払ってもこいつあんまり歓迎されてないよ。

佳純

え？

村木

不思議なんだけど、麻衣ちゃん俺にはこの間の事は無かったみたいに愛想いいんだよ。でもこいつの事はもう店に来るなみたいな扱いで。

亜矢子

どういう事？

村木

一樹、お前多分ストーカーだと思われてるよ。

三平

ストーカー、

佳純

一樹君。

一樹

そんな事…。

村木

お前あんなに拒否られてんのに、帰り際に、「また指名するから」なんて言
つたろ。あれ余計キモって感じだぞ。

翔太

…一樹、ホント情けないな。

一樹

…いいよ俺、どう思われても。

村木

あ、それ完全にストーカー心理だ。

一樹

え？

村木

相手の気持ちはお構いなし、自分の思いを伝えたいだけ、そういう事だろ。

佳純

一樹君、

一樹

違う…俺は、ただ…。

亜矢子

ただ、どうしたの？

一樹

…こないだ、定食を食べて急に泣き出したあの子を見て…何か、訳が有る

んじや無いかって思つて。

佳純

それを聞き出す為に、そのお店に通つてるの？

一樹

…（頷く）

三平

聞いてどうするんだよ。お前に何か出来るのか？

一樹

…出来るかも、知れない。

三平

あのな一樹、人間誰だって何かしら事情を抱えながら生きてるもんだ。だ
けどそれは大抵、他人にはどうしようもない事なんだよ。

亜矢子

…そうよね。

翔太

お前には見えたんだよな。自分には解決出来ない事情で泣いてるあの女の
姿が。そりや見えるだろ、幼稚園で子供の膝小僧に薬つけてやつてる姿
も見えたんだから。

三平

翔太、

村木

うん、諦める。どっちにしても、麻衣ちゃんがお前の事を好きになる可能

性はほぼゼロだから。

一樹

俺もう、好きになって貰おうなんて思っていないから。

佳純

じゃあ、どうして？

一樹

…放っておけないだけです…一度は好きになった子だし。

村木

はあ？

三平

…やっぱお前は馬鹿だな。

佳純

気持ちが分からない訳じゃないけど…。

翔太

俺悔しいんですよ、こいつの馬鹿さ加減が。こいつがこんな風に思ってるも、あの女は…。

亜矢子

ねえ佳純ちゃん。

佳純

はい、

亜矢子

…こんなに思われて、嬉しくない女なんているかな。

佳純

え、

亜矢子

…あの子、もしかしたら…。

下手より、麻衣登場。

佳純

あ…いらっしやい。

麻衣

…この間は、どうも…。

佳純

いえ、

麻衣

日比野君、ちょっと、いいかな。

一樹

え、

麻衣

工場に行ったの、そしたらここだろうって言われて。外で、ちよつと話せる？

一樹

…ああ、いいけど、

翔太

こいつ今昼飯注文したばかりだよ。

麻衣

…そっか、じゃあ、表で待ってるから。

一樹

いいよ、行くから。佳純さん、お勘定、

翔太

ここで話せよ。

佳純

翔太君、何言ってるの。

三平

翔太、外野は口出し出来ないよ。一樹、お前の日替わりは俺が食つといてやるから、行つて来い。

一樹

…うん。

翔太

俺、外野じゃないから。

三平

翔太、

翔太

一樹とは小学校一年の時から付き合いだし、

佳純

翔太君、

翔太

小学校の入学式の最中に、こいつが俺の足踏んで喧嘩になって、でも一週間でメチャクチャ仲良くなって、6年間ずっと同じクラスで、中学では同じ女の子も好きになったし…俺、外野じゃないから。

一樹

…翔太。

翔太

あんた、工場行って来たんなら分かるよな。俺もこいつもあんな汚い所で一日中汗や油でドロドロになって働いてんだよ。そうやって稼いだ金を、こいつから巻き上げるのやめてくれないか。

一樹

（翔太に）俺が勝手に店に押しかけてるだけだから、

翔太

こいつ馬鹿だし、今はあんたの事で舞い上がってるけど、普段は、俺よりはまともな奴なんだよ。

一樹

翔太、

翔太

いつもは俺の方がこいつの世話になってて、これまで何度も助けられたから、放っておけない。あんた、こいつ欺したら小銭にはなるかも知れないけどさ、もうこいつ会社で前借りもしてるし、絞り出してもこれ以上金なんか、

麻衣

分かった。

一樹

え、

麻衣

…ここで話すから。

一樹

ちよ、ちよっと待ってよ。

麻衣

(一樹にいい友達がいて、羨ましい。

一樹

やっぱり、外行こう。

麻衣

日比野君、あんたもう店に来ないで。

一樹

え…だから、それは、

麻衣

私、あんたの手に負えるような女じゃ無いから。

一樹

別に俺は、

麻衣

何か訳があるんだろ俺で良かったら話してよって、しつこく言ってたよね。訳はあるよ。あるけど、ぶっちゃけあんたに助けて貰えるような話じゃな

いの。せっかく言ってくれてるのに悪いんだけど、あんたじゃ無理。歳は大して変わらないかも知れないけど、私あんたよりずっと色々経験してるから。

一樹　…そうかも、知れないけど。

麻衣　こう見えて、バツイチの子持ちだから。

一樹　え、

麻衣　もっと言えば、高校中退してヤンキーやってた事もあるし、結婚して子供が出来ても母親になりきれなくて、嫁ぎ先を追い出された女だから。

村木　へーそうなんだ。　（三平と佳純に睨まれ、ぺこり）

麻衣　おどろいた？今はね、人生お金だつて本気で思ってる。恋愛とか結婚とか男とか、正直こりこり。金のない男につきまとわれるなんて、すつこい迷惑なの。だから、あんたもう店に来ないで。

一樹　…うん、分かったよ。

麻衣　言いたかったのは、それだけ。じゃあね。（下手に）

亜矢子

ちよつと待つて。

麻衣

(立ち止まり振り向く)何ですか。

亜矢子

…今の、半分本音で、半分違うんでしょ。

麻衣

え？

亜矢子

だつて、本当にお金の事しか考えてなかったら、わざわざ時間作つてこんな所に来て、こんな話をする筈無いもん。一樹君の事、ちよつとは心配してくれたのよね。

麻衣

…だから私、人の事構つてる余裕なんて、

亜矢子

私は本当に外野だけど、一樹君や翔太君とはここで毎日顔合せてるから、勝手に母親みたいな目で二人の事見ちゃつてるの。出しやばつてゴメンなさい。お店で冷たくしたのは、これ以上お金を使わないようにつて、心配してくれたんでしょう。

麻衣

…。(暫く亜矢子を見ているが、やがて目をそらす)

三平
(麻衣の様子を見て)そっか。一樹、結局お前が一番、皆んなに心配して貰
つてゐる事だ。

一樹
え、

三平
どっちにしてもお前はもうちよつと大人になれ。

一樹
∴。

佳純
でも大人になれないピュアなところが、一樹君の良さでもあるのよね。で
しょ翔太君。

翔太
∴俺にふらないでください。

亜矢子
(麻衣に)ねえ、貴方、時々この店にご飯食べに来たら。

麻衣
え、

亜矢子
お店も近いんですよ。

村木
近いよ、駅の反対側。

三平 あんたここの飯、旨いって言ってたもんな。

麻衣 …でも…私みたいな…。

佳純 勿論ウチは大歓迎。

亜矢子 一樹君の事はちよつと置いといてもえ。

村木 うん、ストーカーは近づけないから。

一樹 ムラさん、

笑う三平とムラ。

隆三(声) 佳純く、

佳純 あ、いけない、忘れてた。(厨房へ行くとする)

隆三 (厨房入り口前で)何やってる、

佳純 ごめん、今ちよつとこつち取り込んでたから。

隆三 言い訳するな。

佳純 父さん、

隆三 出来たてが勝負って料理は、一分置いたら味は三割落ちるんだ。

佳純 …ごめん。

三平 まあまあ、おやつさん、

隆三 早く出せ。冷めた定食だ、勘定は取るな。

佳純 え、(厨房に戻る隆三が見えなくなつたのを確認し、皆にごめんなさい、ウチも厳しいんで、お勘定は普通に頂きますから。

三平 分かつてるよ。(笑)

隆三(声) 佳純、

佳純 今行くから、(厨房に向かう)

三平 佳純、俺とこの子の日替わり二つ追加、

佳純　　ん、まいど。(厨房に退場)

麻衣　　え、

三平　　(麻衣に) いいよな。

麻衣　　…はい。

三平　　(村木と一樹に) ほら、注文済んでるお前らはそこ並んで、佳純を手伝え。

村木　　分かったよ。

三平　　翔太、お前もだ。麻衣ちゃんだっけ？ほらここ座って。(村木が座っていた席)

麻衣　　はい(座る)

一樹、村木、翔太、が厨房の入り口に並び、出て来る料理を受け取る。まず一樹が日変わり定食を持って元の席に座ろうとする。

三平　　一樹、(上手の席を指し) お前あっち。

一樹

え、

三平

席替えすつから。ムラ、お前も一樹と一緒にあつち。

村木

何すかそれ。(しぶしぶ一樹と同じ席に向かう)

三平

翔太は、元んどこでも一樹と一緒にでも、好きにしろ。

翔太

え、(ちよつと不本意な顔を装い、結局一樹達と同じ席に)

三平

亜矢子さん、すみません、それ持ってこつちに。

亜矢子

あら、あたしそつち？(楽しそうに麻衣の隣りに移動)

三平は麻衣や亜矢子と同じ席。厨房から出て来て、麻衣に水を出す佳純。

佳純

(麻衣に水) 日替わり、ちよつと待つてね。

麻衣

(頷いた後三平に) 仕切るの、上手いですね。

三平

そう？(笑)

亜矢子

三平さんはこのムードメーカーだから。

麻衣

…チームみたい。

三平

麻衣ちゃんも入っていいよ。チーム底ん処、万年Cクラス。

麻衣

(佳純に)このお店、お父さんと二人でやってるんですか。

佳純

うん、びつくりしたでしょう。あんな頑固親父だから、もう毎日大変なの。

麻衣

…本当に…全部、羨ましい。

佳純

え、

三平

羨ましいって、何が？

麻衣

…ここにいる人、みんな仲が良くて、ちゃんと心が通い合ってる。(佳純に)お父さんの料理はすごい美味しくて、親子で一緒にこんな仕事が出来て…。

佳純

あのね、そんないいもんじゃないよ。ウチの父さんいつも不機嫌で、何やってあげても、ありがとうの一言無いからね。

三平

(笑)おやさんが礼なんて言ってるのは聞いた事が無いな。

佳純

女に包丁は持たせないとか平気で言うし、ほら、さっきも冷めた定食でお代は貰えないとか、まあ格好つけちゃって、この店火の車なのよ。

亜矢子

隆三さんは仕事に誇りをもってるから。

佳純

わがままなだけよ。

麻衣

…すごいですよね…。

佳純

何が？

麻衣

ここの料理。

佳純

ありがとう。

三平

確かに、ここの飯は旨い。

麻衣

こないだ食べた時、私、分かったんです。あのおばさんが言ってた本物って、こういう事なんだって…。

たがいに視線を交わす佳純と三平。

亜矢子

おばさん？

麻衣

…（苦笑い）別れた旦那のお母さん。

佳純

お姑さん。

麻衣

私、育ちが悪くて、なのに全然釣り合わない相手と結婚したもんだから、お義母さんから毎日ダメ出しされたの。自分なりに頑張ってたつもりだけど、家事なんてそれまでちゃんとやった事なかったから、何やつても怒られて…。

亜矢子

…同居してたの？

麻衣

（頷き）私…少し、体調が悪かった日にね、お義母さんも外出してたから、二歳になったばかりの息子と、お昼をコンビニの弁当で済ませようとした事があったの。そこにお母さんが帰って来て、すっごい怒られて、あんたは母親失格だ、私の孫を駄目にしないでって、お弁当を床に叩きつけられて、こんな物、子供に食べさせる物じゃないって、嫁としても失格だから出て行って言われて…。

佳純

旦那さん、庇ってくれなかったの？

麻衣

優しい人だったから、気にするなって言ってくれたけど…でも、お義母さんが言ってる事は正しいって。

亜矢子

…そう。

麻衣

それから暫くは頑張ってみたけどね、でも、結局駄目で…。

佳純

お子さんは？

麻衣

渡して貰えなかった、私に子供は任せられないって。

一同

…。

麻衣

見る物、聞く物、食べる物、子供には何でも本物を与えなきゃ駄目。けどあんたは本物を何一つ知らないって…大げさだと思った…でも、その通りなんだよね。私は親に本物を教えて貰えなかったからこうなっちゃったの…幼い子供にコンビニ弁当を食べさせても、何とも思ってた無かった…このご飯、一口食べた時に、あくこれ本物だと思ってたの。(涙声)こういうご飯を、あの子に食べさせたいって、そう思った途端に、何か、泣けて

きちゃつて…。

亜矢子

(ささやくように) うん…そっか…そっか…。

— 暗転 —

翌朝、定休日の底ん処。坂崎一人、椅子に座っている。

隆三

(住居の方から顔を出し) 悪いね、いや電話した後に、包丁の他にもちよつと思ひ出した物があつて。すぐに見つけるから、待つて貰つていいかな。

坂崎

全滅構いませんから、ゆつくりどうぞ。

住居の方に戻る隆三。暫くして坂崎のポケットでマナーモードの呼び出しが鳴る。

坂崎

もしもし、どうだったあれ？…え、もう結果が出たって、編集会議は明日の筈だろ…部長判断…うん…いや、単純に長すぎるって事なら短くするし…うん…うん…そこを何とかならないか…うん…そっか、分かった…ちようど今その店に来てるとこだよ…いや、お前のせいじゃないよ…うん…色々ありがと…じゃあ。(スマホをポケットに戻す)

隆三

(古い書き物を持って住居から登場) お待たせ、見つかったよ。これなんだ

けどね。もうほとんど身体に染みついている習慣だから、今更読み返す事も無いし、しまい込んでたんだよ。

坂崎

…はい…。

隆三

（表紙の文字を指し）「底ん処、生業の心得」なんて、こんな大衆食堂が、ホントに大げさんだけどね、親父が書いた料理人としての人生訓みたいなもんだよ。だからこれに、親父が使ってた年代物の包丁を添えて写真を撮って、記事と一緒に載せて貰えたらと思つて。

坂崎

…はい。

隆三

佳純は、もう店の写真を撮って貰ったんだからそれで充分だろうって言うんだけどね、俺はやっぱり親父の形見も載せたくて。

坂崎

…そうですか。

隆三

（坂崎の様子を見て）もう写真の追加は、難しいかな？

坂崎

あの、ご主人…。

隆三

何だい？

坂崎

実は、ですね…。

隆三

駄目だったか。

坂崎

えっ…あ、すみません。

隆三

そっか。

坂崎

今、電話が入って…。

隆三

気にしないでいいよ。元々あんたそう言ってたんだから、掲載出来ない可能性もあるって。

坂崎

本当に、申し訳ありません。力不足で。

隆三

もういいから。

坂崎

結局、お騒がせただけで…。

隆三

坂崎さん、実はね、雑誌に掲載出来ても出来なくても、あんたに頼もうと

思ってた事が、も一つあるんだよ。

坂崎

えっ、

隆三

むしろ、こっちの方が大事な話になるんだけどさ。

坂崎

はい、

隆三

自費出版って、あるらしいじゃない。自分で金を出して、ちゃんとした本を作るって話。

坂崎

あ…はい。

隆三

前々から、考えてたんだよ。だけど自分じゃ本なんて書けないし、具体的にどこに頼んだらいいかも分からないし。

坂崎

自費出版で、お出しになるんですか？

隆三

うん。あんた書いて貰えないかな、この店の本。

坂崎

私で良ければ、喜んで書きますが、ただ、自費出版では本屋に置いて貰える可能性は、

隆三

それは分かってるよ。ただ知り合いに配ったり、親父の仏壇に供えられたら、それでいいんだよ。

坂崎

分かりました。そういう事でしたら、是非やらせて下さい。

隆三

ありがとうございます。それであと、言いにくいんだけど、あんたへの御礼も含めて、そんなに大金は用意出来ないんだよ。

坂崎

ご主人、金の事は心配しないで下さい。ほとんど費用は掛かりませんから。

隆三

え、そういう訳にはいかないだろう、自費出版っていう位だから、

坂崎

ちよつとしたツテがあります。話の持つて行き方次第ですが、金は掛からないと思います。

隆三

本当かい？

坂崎

はい。ただ、私からも一つだけお願いがあります。

隆三

何だい？

坂崎

書くからにはちゃんとした物を書きたいので、一月でも二月でも構いません、私を厨房に入れて貰えませんか。

隆三

坂崎さんを厨房に？

坂崎

はい。厨房を知らずにこの店の事を本には出来ないと思うんです。

隆三

：言ってる事は分かるが、正直、狭い厨房、素人さんに四六時中突っ立てられたら、

坂崎

見習いの小僧として、使って欲しいんです。

隆三

えっ、

坂崎

まったくの素人ですが、その期間は、料理人の修行をするつもりでやらせて貰います。

隆三

そういう訳には、

坂崎

この店を知るにはそれが一番だと思うんです。それ位本気じゃなければ、本は書けません。

隆三

：分かった。ありがとう。こっちから頼むよ。だけど、短い期間でも見習いは見習いだ、手加減はしないよ。

坂崎

望むところです。本気でお願いします。

隆三

あんた、ちよつと変わつてるね。

坂崎

はい。
(笑う二人)

隆三

いつから始めようか？

坂崎

良かったら、たつた今から。

隆三

せつかちだね。

坂崎

ちよつとワクワクして来ました。

隆三

さすがに今日は定休日だから、明日から来てよ。

坂崎

分かりました。

隆三

でも、ちょっと覗くだけ覗いてみるかい？

坂崎

はい、是非。

いそいそと厨房に向かう二人。下手より佳純の声が聞こえ、登場する佳純と以知子。住居に向かおうとする佳純の前に立ちふさがる以知子。

佳純

以知子さん、私休みの日が一番忙しいんだって。

以知子

だからあつという間に済んじゃうって言ってんじゃない。

佳純

ホントにいそがしいのよ。掃除も洗濯も店に関係無い仕事は定休日じゃないと出来ないんだから。

以知子

あんたの為に言ってるのよ佳純ちゃん。

佳純

お気持ちだけ戴いておきます。

以知子

気持ちだけじゃ綺麗になれないの。

佳純

以知子さん重大な事なんて言うから、私慌てて飛んでったのよ。

以知子 重大な事じゃない、若い娘が綺麗でいるって事は。世間はそれを期待して

るんだから。

佳純 もう若くもないし、私に限っては誰も期待してませんから。

以知子 その考えが良くない。

佳純 ごめんなさい。でもちゃんと髪をセットするなんて、私にはお正月位で十分。

以知子 それじゃ手遅れなの。

佳純 手遅れって、何が、

厨房に背を向けている佳純。厨房から坂崎登場し坂崎に気付かない。

以知子 あ、

坂崎 お邪魔してます。

佳純 …坂崎さん、

以知子

ほら、だから言ったのに。

佳純

え？

以知子

じゃあ佳純ちゃん、またね。

佳純

ちよつと以知子さん、（詰め寄り問いたす視線）どういう事？

以知子

：さつき散歩してたウチの人から電話があつたのよ。駅で坂崎さんと会つて挨拶したらここに向かつてる途中だったつて。だから私は、まあ応急処置でもいいから、佳純ちゃんをちよつとは綺麗にしようと思つて…。

佳純

変なこと考えないでよ。それに何応急処置つて、私のこれ（見た目）事故か病気？

以知子

（ごまかし笑顔）まあそういう訳じゃ無いけど、私もウチの人も佳純ちゃんを応援してんじゃない。

坂崎

あの、佳純さん。

佳純

はい、

坂崎 明日から宜しく願います。

佳純 え、明日からって？

厨房から隆三登場。

隆三 坂崎さん、これ使ってよ。(白衣とエプロン)

坂崎 あ、どうも。(受け取る)

佳純 父さん、

隆三 佳純、坂崎さん、明日から厨房に入るから。

佳純 はい？

曲が流れ、照明変わる。四人が身近なではけ口から退場し、SEで隆三と坂崎の声が越える中、入れ替わりに登場する客達。住居から登場の三平と村木が上手の席に。厨房から登場の亜矢子と麻衣が中央の席に、一樹と翔太が下手の席に、それぞれ着席する。

隆三(SE)

料理を作るって事はね、まず食材の命を頂いて、それを人様の命に繋げる、そんな大それた仕事だ。医者ほど頭は使わないが、同じくらいに心は配る。

坂崎（S E）

はい、

隆三（S E）

どんな仕事も同じだろうが、肝心なことは大抵、見落としがちな小さなところ、
ここに隠れてるからさ。

坂崎

なるほど。

村木と三平の席が明るくなる。

村木

そりゃあ営業は数字がすべてだよ。それが分かってるから、俺もこのまま
じゃ駄目だと思つて部長に相談したのよ。そしたらさ……。

三平

そしたら、どうした？

村木

部長、お前ごときが頭なんか使おうとするなつて、こつだもん。

三平

そりゃ身も蓋もない言い方だな。

村木

だろ、俺もうカチーンと来たからさ、部長の胸ぐら掴んで馬鹿野郎つて、

三平

言つたのか？

村木

て言いたかったんだけどね、「さいでした〜へ〜」なんて自分の頭叩いて、おどけてごまかしたんだよね…。

三平

…そっか。

村木

今日は一日、そんな自分に嫌気がさして…。

三平

まあ、今日とはとことん飲め。

村木と三平の席暗くなり聞こえて来る隆三の声。亜矢子達の席が明るくなる。

隆三(S E)

幸せな客は何かが食いたくてやって来る。悩み事で頭いっぱいのお客様は、それでも腹は減るから、しょうがなく食べに来る。それが食堂だよ。だからこそ、腹も心も満たせる位の料理を出したいじゃない。

坂崎(S E)

そうですね。

亜矢子

じゃあ、正式に親権は向こうに行っちゃってるのね。

麻衣

はい。ウチの母親も子供にはその方がいいって…あちらは元々お金持ちだし、旦那もそれなりの仕事をしてるから、子供がお金や物に不自由する事

はないからって…。

亜矢子

そう。

麻衣

でも、先の事は分からないじゃないですか。もし状況が変わって、将来あの子が、何か助けが必要になって、こんな私の事を頼って来る事があったら、そんな事は無いと思うけど、もしあったら…その時は、どんな事でもして上げられるように、用意しておきたいんです。

亜矢子

…それで、お金を。

麻衣

…はい。

亜矢子

…そう…若くてもやっぱり母親…あなた、偉いわね。

麻衣

…そんな事ないです。

亜矢子

でも、あなた自身の人生も、大切にしなければ駄目よ。

麻衣

…ありがとうございます。

亜矢子達の席が暗くなる。

隆三(S E)

こんな店のお客は、大抵、世の中を目立たない所で支えてる人間だ。きつい仕事、汚れる仕事にも誠実に向き合ってるね。そんなお客には、旨い物を出してやりたいじゃない。

坂崎(S E)

はい。

一樹達の席が明るくなる。

翔太

何だかんだ言っても社長のお氣に入りは一樹だよ。

一樹

そんな事ないよ。

翔太

自分でも分かってるだろ。まあお前は仕事を覚えるのが早いし、手先も器用だからしょうがないけどさ。俺は負けないからな。

一樹

おう。頑張れよ。

翔太

この野郎、余裕かましやがって。

一樹

一緒に上手くなりゃいいじゃん。

翔太 駄目だ。俺が最初に板金工になろうって言ったんだから、俺の方が上手くならなきゃ。

一樹 どっちでもいいのに。

翔太 一樹、俺いつか絶対自分の工場持つからな。

一樹 その為には、翔太はまず色合わせが出来なきゃ。お前、今日のカラー、色全然合ってなかったろ。

翔太 ああ、あれ。まだ新しかったから新車の色番で合わせたんだよな。

一樹 新車登録は二年前、駐車場も外で雨ざらし日ざらし、新車の色じゃないよ。金や黒少し入れないと合わないって。

翔太 お前は一目見てそれが分かるから凄いやな。

一樹 普通分かるだろ。

翔太 あゝ駄目だ、自信なくなってきた。

一樹 しつかりしろよ、未来の社長。（笑う二人）

転換明かり。隆三の声が聞こえる中、一組ずつ下手より出ていく客達。

隆三（S E）

定食屋なんて、目立たず、さりげなくがいい。地味な店構えで、さりげなくそこにある。だけど、温ったかいご飯で元氣を出したい時には、すぐに思い出して貰える、そんな店なら尚更いい。

住居から出て来た佳純が上手のテーブルに伝票と電卓を置き、暖簾を入れに下手にに向かう。暖簾の中に入れ、そのまま上手テーブルに戻り帳簿をつけ始める。明るくなり、時折ため息をついている佳純。暫くして厨房から坂崎登場。

坂崎

佳純さん、これ（汚れた食器）かたしますね。

佳純

あ、ごめんなさい。私が下げないと厨房いつまでも終われませんよね。

坂崎

別に急いではないんです。ただ手が空いたから。

佳純

（片付け始める佳純、手伝う坂崎に）ありがとうございます。

坂崎

どういたしまして。

佳純

帳簿をちょっと覗いてたらつい。父さんと二人だけの時は、後片付けはど

うせ全部私だったから、順番なんてどうでも良かったんです。

坂崎
気にしないで下さい。

佳純
父さんひどいですよね。厨房の片付けは全部見習いがやるもんだ、なんて。

坂崎
そりゃあ見習いですから、当然ですよ。

佳純
坂崎さんが本当に料理人を目指してるんだたらそうでしょうけど、本を書く為にやってるんだから。父さん、自分がお願いしたって事も完全に忘れちゃってますよ。

坂崎
楽しいですよ。実は自分でも驚いてるんです。向いてるかも知れない、この仕事って。

佳純
本当ですか？

坂崎
ええ。やりがいを感じるし、私は見習いですけど、本格的にやったら、色々工夫出来ますよね。

佳純
何言ってるんですか。坂崎さんには弁護士さんって立派なお仕事があるんですから、早くそちらに戻らないと。

坂崎 実は、弁護士に戻るつもりは無いんです。

佳純 え、どうして？

坂崎 (笑顔) 根掘り葉掘り聞きます？

佳純 あ、ごめんなさい。

坂崎 じゃあ、私も突っ込んだ事聞いていいですか？

佳純 え、

坂崎 お店、結構きついんじゃないですか？

佳純 ……どうして分かるんですか？

坂崎 だって、私ここで働いてもう一週間、一見のお客さんなんて数えるくらいしか見てませんから、いつも決まった数、同じお客さんばかりで。

佳純 ……ですよね。分かつちやいますよね。

坂崎

佳純さん帳簿つけながらため息ついてるし、分かり易いです。

佳純

恥ずかしい。片付けも後回しにして、心配事が丸見えですよ。

坂崎

…こんなに旨い料理を出しているのに。

佳純

この近く、私が子供の頃は工場がいっぱいあったんです。大きなメーカーの、車や電化製品の部品とか作る。駅を利用する人の数も今よりずっと多くて。

坂崎

じゃあ、その頃はこの店も。

佳純

ええ。すごく繁盛してました。でもどの工場もこの二十年位の間に次々と閉鎖したり移転したり。最後まで残ってた一つも一昨年海外に移転とかで。そしてついに、駅に急行が止まらなくなつて…。

坂崎

…そういう事ですか。

佳純

街に人がいないんじゃない、商売にはなりませんよね。でも、何とかならないかな。

坂崎

何とかしましょうよ。佳純さん。

佳純

何とかしたいです。でも、こんな街で、地味な定食屋で…。

坂崎

雑誌の原稿、ボツになったじゃないですか。あれ、私が熱くなって書き込み過ぎたんですよ。任されたのはページ半分程度の小さなスペースだったのに、無理矢理、今週号の特集かって位いっぱい書いてちゃって。でも、そうしたくなるくらい感動したんですよ、お父さんの料理に。お店の雰囲気だって、むしろ今の日本人には懐かしい魅力がいっぱいですよ。

佳純

でも、人のいない街じゃ。

坂崎

そうですね…あ、じゃあ、人がいるところに行きますか。

佳純

え、それって？

数日後の夜、閉店後の底ん処。常連客達が集まって、チラシ用の写真を撮っている。下手前でカメラを構える三平。翔太、亜矢子、村木。

三平

じゃあ、亜矢子さんカメラに近いこつちの目立つ席に、

亜矢子

ここでもいい？

三平 お願ひします。ムラ、お前は一番奥な。

村木 え、いつもそういう扱いなんだから。

三平 翔太は、そっち、

翔太 はいよ。

坂崎 あの、三平さん、

三平 いいから任せとけて。俺写真はちよつと自信あんだから。

坂崎 でも…。

三平 やっぱこの人数じや繁盛してる感が出ないな。翔太、一樹まだか？

翔太 もう来ると思うけど。

三平 じゃあちよつと待つか。

坂崎 あの、写真撮るんでしたら、

三平

任せとけつて、俺セミプロだから。

坂崎

ええ、ですが、

三平

いいかみんな。とにかく、毎日世話になつてゐるこの店が九回裏ツアーウトの大ピンチなんだよ。ここは俺たち常連客が一致団結して逆転満塁サヨナラホームランと行こうじゃないの。

亜矢子

そうよね。

村木

俺も何でもやるよ。

三平

その意気だ。(佳純が住居から登場) お、佳純、親父さんは？

佳純

嫌だつて。

三平

やつぱさうか。ホント偏屈なんだから。まいいよ俺達だけで。なつ先生。

坂崎

いや、どうせ写真載せるんだつたら、ご主人にも参加して貰った方が、

一樹

(下手より) 遅くなりました。

三平 おく一樹、待ってたぞ。今、チラシに載せる写真撮るところだから、お前そこに座って。

一樹 うん（外を見て）麻衣ちゃん、

三平 ん？

麻衣 （登場。入って戸を閉める。一樹は席に着く）お邪魔します。

佳純 あれ、麻衣ちゃん、この時間お店は？

麻衣 …辞めました。

佳純 え、辞めたって、

麻衣 近頃お客が少ないからって、同伴ノルマとか締め付けがどんどんきつくなってきたので、

佳純 そう。でも大丈夫なの。

麻衣 どうせあの店、もうすぐ潰れるだろうって女の子達みんな噂してるんです。私も、そろそろ水商売は卒業しようかなって思ってたし。

佳純

そうなの。

麻衣

あの、私もお邪魔していいですか？

佳純

もちろんよ。

三平

麻衣ちゃん、今チラシに載せる写真を撮ってるから、適当に座って。

麻衣

はい。(先に一樹の隣に) 一樹君、ここいい？

一樹

うん。(座る麻衣。一同、二人の変化に気付く)

三平

…一樹君…(ちよつと驚き楽しそうに) とまあ、そんな感じで。

村木

(笑顔) どんな感じよ。

三平

いや、いろいろ幸先が良さそうだ。

村木

早く撮ろうよ。

三平

慌てんなって。良い感じにメンバーが揃ったんで、もう一回整理するけど、

みんなに集まって貰ったのは他でもない、俺たちが愛するこの底ん処は、今、危機的な経営状況にあるんだよ。

佳純
すみません。

三平
そこで、この店の婿になる坂崎さんのアイデアで、

佳純
え、ちよつと三平さん、

三平
沿線上の急行が止まる駅に出向いてチラシを配ろうという話になったんだよ。

坂崎
三平さん、何か、誤解があるようなんですけど、

三平
え、チラシ配らないの？

坂崎
いえ、そうじゃなくて、

下手より、以知子登場。

以知子
こんばんは。

佳純

以知子さん、

以知子

チラシの叩き台、やっと出来たわよ。

三平

遅いよ。

以知子

何言ってるの。クオリティーに拘ったんじゃないの。ほらみんなこっち。

坂崎と佳純以外は全員以知子の周りに集まる。

佳純

ちよつと待って以知子さん、

以知子

(中央のテーブルの上にジャンプ。

人垣が出来、坂崎や佳純からはチラシは見えない。

村木

(覗き込む)おどピンク、

麻衣

可愛い、

一樹

これ目立ちますね。

以知子

でしょ。

翔太

あ、このイラスト、佳純さんと坂崎さんですね。

佳純

え、

亜矢子

隆三さんは？

以知子

今回は遠慮して貰ったの。コンセプトは親しみ易さだから。

村木

だったら親父さんは出せないな。

翔太

これスンゲー超ラブラブですね。

亜矢子

でも確かに、応援したくはなるわね、「若夫婦が営む愛情食堂」。

坂崎

ちよつと待って下さいよ、

佳純

(強く) 以知子さん、

以知子

怒らないでよ佳純ちゃん。そりやあまだ「夫婦」は気が早いかも知れないけど、これ営業戦略だから、細かいことは、

佳純

いやいや、そういう問題じゃないでしょ。

坂崎

そうですよ。困りますよ。

三平

いいんじゃないの。遠からず結婚すんだから、そのめでたい勢いをそのまま集客に繋げてさ。

佳純

（抗議）誰が結婚するの？

三平

：誰がつて。

坂崎

そうですよ。誰と誰が結婚するんですか？

三平

（指さし）この二人。

佳純

はあ？

以知子

あれ、もしかして、これまだオフレコだった？

佳純

そうじゃなくて、私達、結婚なんてしません。

三平

え？

坂崎

佳純さんの名譽の為に言いますが、そんな話は、全く、これっぽっちも、爪の垢程ほどもありませんから。

佳純

何でこうなるの？

三平

だって、坂崎さん親父さんに気に入られて婿養子に決まったって。でもってこの店の後を継ぐために厨房で修行を始めたって。

佳純

以知子さん、

以知子

…じゃないの？

坂崎

私が厨房に入ってるのは、ご主人に頼まれて本を書く為です。

三平

本？

坂崎

そうです。この店について書いた自費出版で出す本。その取材の延長です。

以知子

…（ごまかし笑） そうなの。それを早く言つてよ。

三平

おい。

佳純

まったく。

以知子

ごめんなさい。

村木

なぐんだ。俺達もてつきり、あくそうなんだって。（翔太や一樹に）なあ。

翔太

そうつすよ。ちよつと展開が急でびつくりしたけど。

亜矢子

本当だったら良かったのに。

佳純

何言ってるんですか、亜矢子さんまで。（坂崎に）あの、坂崎さん、すみませんでした。

坂崎

え、何で佳純さんが謝るんですか。

佳純

だって、私なんかと、気を悪くされたんじゃないですか？

坂崎

とんでもない。むしろ私の方こそ申し訳無い。気を悪くしないでくださいね。

佳純　いえ、私はそんな、ホントにゴメンなさい。

坂崎　いや、だから、私の方こそ申し訳無いんですつて。

一同、二人を見ている。

佳純　（皆の視線に気付き）何？

一樹　いえ、何でも。

麻衣　…お二人、何かお似合いですよね。

佳純　麻衣ちゃん何言ってるの、やめてよ。

一樹　うん、いい感じじゃないですか。

坂崎　はい、もうこの話はお仕舞いです。チラシの方に話を戻しましょう。

三平　（笑）分かった分かった。じゃあ、チラシの叩き台はもう一度作り直すとして、写真を撮るか。

坂崎　ていうか三平さん、私さっきから言おうとして聞いてもらえてないんです

けど、この写真、お客様で賑わう店の様子を撮るんですよね。

三平

そうだよ。

坂崎

料理は無くてもいいんですか。

三平

え、あつ、

亜矢子

三平さん、

三平

だよね。

翔太

まったく、

佳純

ちよつと待つて貰えたら、どうせ何か作つて貰うつもりだけど。

三平

いや、写真も後にしよう。

村木

え、

三平

先にチラシ配りのローテーション決めよう。

亜矢子

了解。

三平

一人、週二、三時間って感じで行こう。

村木

え、そんなもんでいいの？

三平

うん。基本的に無理はしないで、空いてる時間で。

一樹

二人一組とか？

三平

うん、そうだな。みんなの一週間の予定、フリーな時間帯ってどんな感じかな？

村木

俺は休みの土日だったら、いつでもOK。

翔太

俺と一樹も土日はオールフリーだよ。な。

一樹

うん。

麻衣

私は次の仕事が決まるまで、毎日でもお手伝い出来ます。

三平

そっか。

亜矢子

私だって気ままな一人暮らしだから、いつでも大丈夫よ。

三平

みんな結構いけるね。

以知子

（三平）あんた身体なまってるんだから、毎日やりなさいよ。

三平

えー、（一同笑う）

佳純

ごめんなさい。私は店の定休日に、

坂崎

そうですね。私もここが休みの時に、

以知子

あれ、それって二人一緒につて事？

坂崎

え、そういう意味じゃなくて、

佳純

な、何言ってるの以知子さん、

以知子

だって、ねえ。

亜矢子

それでいいんじゃない。

坂崎 だからそういう意味じゃないですって、

一樹 三平さん、そこ決定って事で。

佳純 何言ってるの一樹君、

三平 はい、佳純と坂崎さん二人決定。

笑う一同。住居の方から見ている隆三。

曲が流れ、舞台奥は暗くなる。テーブルを奥に移動。以知子が全員にチラシを渡し、チラシ配りを始める面々。それぞれ違う日に、二人一組となつて配っているイメージ。翔太と村木、三平と亜矢子、一樹と麻衣、佳純と坂崎。

翔太 美味しい食堂、底ん処をよろしく。

村木 人情食堂、底ん処をよろしく。

翔太 お願いします。

村木 お願いします。

翔太 頑固親父が作る絶品の日替わり定食、底ん処をよろしく。

村木 つくねハンバーグもおいしいですよ。底ん処をよろしく。

翔太と村木奥に移動しチラシを配り続けているイメージ。舞台前に三平と亜矢子、客席最前列の観客にもチラシを渡し、声を掛けながら、通路にも降りてチラシを渡す。

三平 美味しい食堂、底ん処をよろしく。

亜矢子 人情食堂、底ん処をよろしく。

三平 お願います。

亜矢子 お願います。

三平 頑固親父とべっぴんの看板娘、底ん処をよろしく。

亜矢子 イワシの甘酢漬けもおいしい、底ん処をよろしく。

舞台奥に移動する三平と亜矢子。代わって麻衣と一樹が舞台前でチラシを配り始める。

麻衣 美味しい食堂、底ん処です。

一樹 あったかいご飯で心もあつたまる底ん処です。

麻衣 よろしくお願いします。

一樹 よろしくお願いします。

麻衣 (一樹は遠くを見ている)今日は、人少ないね。

一樹 うん。

麻衣 一樹君、

一樹 ん？

麻衣 今、あの二人を見てたでしょ。

一樹 え、

麻衣 あそこでイチヤイチヤしてる二人。

一樹

え、見てないよ。

麻衣

見てたよ。

一樹

…。

麻衣

…ごめんね。

一樹

え、ごめんって、何が？

麻衣

…もう少し、時間くれる。

一樹

あ…うん。

麻衣

私…まだ子供の事しか、考えられなくて…。

一樹

大丈夫だよ。俺…いくらでも待てるから。

麻衣

…ありがとう。ね、駅の反対側に行ってみようか。

一樹

うん。

舞台奥に移動する二人。代わって下手から佳純が、少し遅れて上手から坂崎が舞台前に。

坂崎　こっちは終わっちゃいました。佳純さんあと何枚くらい残ってます？

佳純　あと十枚くらいかな。

坂崎　半分いいですか？

佳純　ありがとうございます。（坂崎にチラシを半分渡す）

坂崎　結構配りましたよね。これが全部集客につながるというんですけど。

佳純　坂崎さん、毎日厨房で疲れてるのに、こんな事までして頂いて、本当にありがとうございます。

坂崎　いいえ。本も、いいのが書けるように頑張りますよ。

佳純　何から何までお世話になっちゃって。

坂崎　楽しみながらやっていますから、気にしないで下さい。

佳純

でも、私いまだに分からないんです。父さんが自費出版なんて、何で急にそんな事…。

坂崎

お知り合いに配ったり、お仏壇に供えたいって仰ってましたけど。

佳純

あの、お金の事は、本当にいいんですか？

坂崎

ええ。幸い、友人の出版社、そっち関係もやっつて。

佳純

…いくら何でもタダって言うのは、

坂崎

学生時代に色々貸しのある奴なんです。それに原価なんて幾らもしないらしいですよ。

佳純

そうなんですか。でも必要な時は言って下さいね。少しでしたら何とかしますから。

坂崎

大丈夫ですって。

佳純

…。

坂崎

あれ、雨じゃないですか。

佳純

…ホントだ。

坂崎

これ、急いで配っちゃいましょう。

佳純

ええ。じゃあ、私、向こうで。

坂崎

お願いします。

舞台奥に消える佳純。通りに目をやる坂崎。暫くしてポケットでバイブ音。

坂崎

もしもし。いいところ見つかった？…うん…うん…そっか…じゃあそこは
自費出版専門の？…うん…うん…いや、金額は少しくらい高くても構わな
いよ。それよりクオリティーの方が大事だよ。帯のデザインも含めて、装
丁のきちんとした質の高い本にしたいんだ…うん…うん…あくだったら悪
いけど、もう少し他も当たってくれないか。どうせまだ原稿も書けてない
から時間はある…うん…悪いな、ありがとう。今度埋め合わせするよ。じ
ゃあ。

暗転。明るくなり数日後の底ん処。佳純が箒を手に掃き掃除をしている。翔太が下手より登場。

翔太

おはようございます。

佳純 あれ？おはよう。仕事は？

翔太 休みました。

佳純 え、体調悪いの？

翔太 いいえ。有給の消化です。何日も溜まってたし。

佳純 有給？

翔太 はい。でも俺、病気でもないのに休むの初めてなんですよ。たまにはいいつしよ。

佳純 そうね。たまにはいいか。（テーブルを移動しようとする）

翔太 手伝います。（テーブルを移動する翔太）

佳純 ありがとう。

三平 （下手より登場）おはよう。あれ、翔太何だよお前、工場は？

翔太 休みました。有給休暇、労働者の権利ですよ。

三平 …ふん。一樹は働いてんだろ。

翔太 ええ、もちろん。あいつは社長のお気に入りだから有休なんか取らないです。俺は落ちこぼれだから。

三平 翔太、お前…。

翔太 佳純さん、あの後チラシの反響ありました？

佳純 あったよ。

翔太 ホントですか？

佳純 うん。チラシ持つて来た人、二人もいた。

翔太 …二人。

佳純 そ、二人。

翔太 結局何枚配ったんでしたっけ？

三平

ほぼ一万枚だよ。

翔太

…一万枚で二人か…。

三平

現実には厳しいって事だ。お前も仕事サボったりしてたらクビになるぞ。

翔太

いいすよ俺。どうせ板金工には向いてないし。

三平

翔太、

翔太

三平さん、何かいい仕事ないっすかね？

三平

…板金の工場、辞めるつもりか？

翔太

具体的にいつとか、考えてる訳じゃないですけどね。

佳純

翔太君、

翔太

何となく、今の仕事が面白くないっつか。あ、これ一樹には内緒ですよ。

隆三

（前掛けを手に、住居から登場）勿体ない話だな。

三平

おやっさん、

隆三

たかだか四、五年だったとしても、職人だったら、自分なりに毎日工夫をこらしたり、技を磨いてきたんじゃないのか。

翔太

…そうだけど。

隆三

それが惜しくなかったら、辞めたらいいさ。

三平

本気じゃないんだろ、翔太。

翔太

ただの、愚痴ですよ。

隆三

佳純、山本さんとこ明日法事だ。亡くなった婆ちゃんが好きだった煮物を作るから、お前、今日少し早く終わって届けてくれ。

佳純

え、そんな注文があつたの？

隆三

最良にして貰ってたんだ、法事の時位何かしてやってもいいだろ。

佳純

…分かった。

隆三 (厨房に向かう足を止め、振り返る) 三平、人の事より自分だ。

三平 え、

隆三 いつまでもカミさんに甘えていいのか。

佳純 父さん、

厨房に退場する隆三。

三平 ∴。

翔太 そう言えば、三平さんは何で…。

佳純 翔太君、いいでしょ。

翔太 だって、

三平 翔太、人間な、たった一回逃げただけでも、その先勝負するのが怖くなる時もある。

翔太

え？

三平

だから、余計なお世話だけど、出来たら仕事は辞めるな。

佳純

…三平さん。

三平

佳純俺、帰るわ。(下手に

佳純

(後ろ姿に)三平さん、ごめんね。

翔太

俺、悪い事聞いちゃいました？

佳純

三平さんってね、昔はすごく成績のいい営業マンだったの。

翔太

営業、何売ってたんですか？

佳純

ブルドーザーとかショベルカーとか。

翔太

へー。

佳純

でも、建設業界が不況になった時、上司の酷いパワハラに遭って、会社に行けなくなっちゃったの。

翔太

…そうなんですか。

佳純

でも、三平さんは戦ってるの、奥さんの以知子さんと二人で。

翔太

みんな、色々あるんですね。

佳純

そりゃあそうよ。人間生きてりゃ色々あるわよ。

翔太

あの、亜矢子さんって、どういう人なんですか？

佳純

何、色々聞いてくるね。

翔太

この際ですから。

佳純

亜矢子さんは謎なのよ。

翔太

え、佳純さんも知らないんですか？

佳純

知っててもそんなペラペラ喋れないよ。

翔太

いいじゃないですか。教えて下さいよ。

佳純　そうね。今は独り身、昔東京に住んでた、おしやれで教養があつて、誰にでも優しい。

翔太　それ俺や一樹でも知つてる事だけじゃないですか。

佳純　そうよ。謎でいいんじゃない。こんな食堂には色んな人がやつて来る、色んな人生が集まつて来るって事で。

翔太　何か綺麗にまとめようとしてます？

佳純　朝ご飯まだでしょ。おにぎり位なら用意出来るよ。

翔太　じゃあ、お願いします。

佳純　うん。(厨房に)

翔太　(スマホをいじり始める)ア・ヤ・コ…百二歳最高齢スイマー、違うな。テコンドーチャンピオン女子高生、絶対違う。苗字が分かればなあ…(思いついたように)ベ・ン・ゴ・シ…サ・カ・ザ・キ…ん？

佳純　(厨房から顔を出し)ね、鮭、梅、おかか、どれにする？

翔太

(画面から目を離し)佳純さんごめん。用事思い出した。

佳純

え？

慌てた様子で、出て行く翔太。

―― 暗転 ――

その夜の底ん処。仕事を終えた隆三が厨房から出て来て、椅子に座る。少し遅れて坂崎も登場。

坂崎

お疲れ様です。

隆三

お疲れさん。坂崎さん、ちよつと時間いいかな？

坂崎

ええ。大丈夫ですが。(座る)

隆三

毎日すまないね。

坂崎

いえ。

隆三

ビラ配りまでしてくれて。

坂崎

(苦笑)これで、二連敗ですよね。

隆三

二連敗？

坂崎

ボツになった雑誌の記事、無駄なチラシ配り。

隆三

いや、その気持ちには本当に感謝してるよ。

坂崎

効果が無かったら意味ありません。でも、何か方法はあると思うんです、この店をお客でいっぱいにする。

隆三

あんた、どうしてそこまで一生懸命になってくれるの？

坂崎

：当然ですよ、こんなにいい店。

隆三

：ありがとう。実はね、話してなかったけど、この店、閉めようと思ってさ。

坂崎

え、店を閉めるって、

隆三

本を出す事も、それで思いついたんだ。客は減る一方だし、跡取りもいない。もうこれ以上無理だと思って。だけどやっぱり、親父には申し訳無くてね。せめて何か形に残そうと、本でも出すかって。そしたら偶然あんた

と知り合つて、こゝやつて厨房まで手伝つて貰う事になつて…。

…そうだったんですか。

…あんたが、あんまりいい人だから…。

そんな事は、

それで、いきなりなんだけどさ、あんた、佳純をどう思う？

え、

もし良かったら、あいつを嫁に貰つてくれないか。

…あの、

使いに出したから、佳純は今いない。あんたの正直な気持ちが聞きたいと思つてさ。どうだろう。

…佳純さんは、とても素敵な女性だと思います。

そりや言い過ぎだ。

坂崎

隆三

坂崎

隆三

坂崎

隆三

坂崎

隆三

坂崎

隆三

坂崎

いえ、本当です。

隆三

器量も良くない、色気も無い。

坂崎

そんな事は、

隆三

だけどね、性格は母親似で、裏表のないまつずぐな奴なんだ。俺がこんな人間だから随分苦労させた分、人の痛みの分かる娘に育ってくれた。

坂崎

佳純さん、いつもお父さんの事を心配してますよ。

隆三

：俺は父親失格だけど、佳純にだけは幸せになって貰いたいんだ。あんたが佳純と一緒にあって、この店を続けてくれたらって、そんな勝手な事も考えたが、そりゃあ二の次三の次だ。佳純を幸せにしてくれたら、それでいい。もう同じ間違いはしたくないんだ。

坂崎

：間違い？

隆三

実はね、佳純には輝生って兄貴がいたんだ。傷害事件を起こして、服役中に病気になるって、そのまま死んでしまった。この輝生はね、子供の頃は優しい子だった。なのに俺が育て方を間違えて、道を誤らせてしまった。

息子を育てようとしなくて、跡取りを育てようと必死になった。あいつの言葉に耳を貸さなかった。俺は、輝生の命が尽きようとしていたときも、病床を見舞う事さえしなかったんだよ。きつと、俺を怨んで死んでいったと思う。

坂崎

…ご主人。

隆三

だから、佳純にだけは、こんな店の行く末なんか気にせず、幸せになつて貰いたい…そう思つて。だけど、輝生は死んじまったとはいえ佳純の兄だ。だからあんたが佳純と一緒になつたら、身内に犯罪者を出した家と、縁続きになるつて事だ。それも分かつた上で、答えて欲しい。

坂崎

…あの…私は…。

隆三

九分九厘断られるだろうと思つて話してるから、遠慮はいらないよ。

坂崎

いえ、そうじゃないんです。そうじゃなくて…。

入り口の戸が開き、三平登場。

三平

(下手より)こんばんは。

隆三 何だ三平、こんな時間に。

三平の後から、以知子と翔太も登場。

以知子 お邪魔します。

翔太 こんばんは。

隆三 みんなどうした？

三平 すみません、三人で色々迷って、でもやっぱり、親父さんには知らせるべきだと思って。

以知子 坂崎さん、あんた、ここに何しに来たの？

坂崎 ……何しにつて、

翔太 俺、弁護士・坂崎つて、ネットで検索したんだよ。

坂崎 ……。

隆三 何の話をしてる？

翔太

画像も出てた。間違はなく坂崎さんだった。

三平

どういうことだよ。ネットに書いてある事は本当かい？

坂崎

…ええ…大半は、真実です。

下手の戸が開いて、佳純登場。

佳純

たたいま。

翔太

佳純さん。

佳純

あれ、みんなどうしたの？

隆三

佳純、

佳純

父さん、山本さん留守だったよ。しょうが無いから煮物はお隣に預けて来たの。もしかして電話してないでしょう。(雰囲気につき)何、何かあった？

三平

佳純、翔太が坂崎さんの事をネットで調べたんだ。

佳純

え、

翔太

坂崎さんの事、悪く書いてる人が、いっぱいいた。

以知子

(坂崎に) 刑務所にも、入ってたのよね。

佳純

以知子さん、何言ってるの？

坂崎

佳純さん…その通りなんです。

佳純

え、

三平

あんた、

以知子

そんな人が、何でこの店にいるの、目的は何なのよ？

坂崎

…全部、お話します。

佳純

坂崎さん、

坂崎

ご主人、佳純さん、隠していた事を、お許し下さい。

隆三

：あんた、本当に刑務所に入ってたのかい。

坂崎

ええ。

三平

そんな人間が、ここで何をしてるんだよ。

坂崎

：以前、ある投資会社の顧問をしていた頃、私は、自分自身の愚かさで、会社が私に隠していた幾つかの事実の為に、法を犯してしまいました。顧客を欺して多額の損害を与えた事件に関与したとして、有罪の判決を受けました。そして、服役した刑務所で：輝生さんと知り合いました。

三平

え、

佳純

お兄ちゃんと、

坂崎

だから私は、輝生さんからこの店の事を聞いて、ここに来たんです。

三平

ちよつと待てよ。輝は二年前に死んだんだ。あんた最近出所したのかい？

坂崎

いえ。輝生さんが亡くなる半年前です。

三平

じゃあ何で今頃来たんだよ。それに何か用があるんなら、何で素性を隠してたんだよ。

坂崎

あの雑誌の記事だけ書いたら、すぐに立ち去るつもりでした。訳とか話さず…それ位しか出来ないと思ったからです。

以知子

どういう事？

坂崎

…刑務所の中で、私と輝生さん、よく助け会ってました。弁護士という私の経歴に他の受刑者が目を付けて絡んできた時、私をかばってくれたのも輝生さんでした。彼も私に、出所したら真面目にやり直したいからって、色んな事を相談して来たり…。

佳純

…お兄ちゃんが。

坂崎

不思議と、馬が合ったというか…私達、狭い雑居房の床の上、重なるように敷き詰めた布団もたまたま隣り合って、夜遅くまで声をひそめて語り合いました。お互いの家族の話、出所後の身の振り方、そんな話です。私の刑期が終わる直前、彼、私に言っただけです。自分もここを出たら、実家の父親に頭を下げるに行くから、一緒に来てくれないかって。

隆三

…輝生が。

坂崎

私、断りました。息子が刑務所での知り合いを連れて来て、喜ぶ親は居ないよつて。輝生さんその時は、やっぱりそうだよねつて、寂しそうに笑つてました。その後、私は先に出所して、半年位立った頃、輝生さんから手紙を貰ったんです。病院の看護師に託して投函されたその手紙には、輝生さんが今病床にあつて、死期が近い事、心残りは、男手一つで自分と妹を育ててくれた父親に、何一つ親孝行が出来なかつた事だつて、書いてありました。

三平

あんた、輝は本当にそう書いてよこしたのかい。嘘や冗談だつたら赦されないよ。

坂崎

（鞆から手紙をすみません。いつかお渡ししなければと思つて、ずっと持つてました。）

佳純が手紙を受け取り、封筒に書かれた兄の文字を確認する。

佳純

（隆三に）：お兄ちゃんの字…。（手紙を隆三に渡す）

坂崎

：輝生さん、自分も本当は店を継いで父親を喜ばせたかつた、昔のような繁盛する店にしたかつたのにつて、書いてるんです。

隆三

輝生が、そんな事を…。

坂崎

それを読んだとき、私、見た事もないお店や、お会いした事もないご家族を、輝生さんに託されたような気がしたんです。だけど、自分にはお役に立てる力も無ければ、そんな資格も無い、そう思いました。だから、何もしませんでした。ただどずつと、心に引っかかってました。そんな時、出版社に勤めている友人から、記事の依頼があつたんです。

以知子

それで、ここに…。

坂崎

せめて、それ位だったらって…それが、こんなに長居する事になって。

三平

…そっか、分かったよ。

以知子

…きつい言い方して、ごめんなさい。

坂崎

いえ。

翔太

俺も、すみません。

坂崎

ご主人、佳純さん、本当に申し訳ありませんでした。

隆三

坂崎さん、

坂崎

そして…お世話になりました。

佳純

え、

下手に向かう坂崎。

以知子

ちよつと待つてよ。

佳純

坂崎さん、

坂崎

(振り返り頭を下げ)ありがとうございました。(出て行く)

— 暗転 —

翌年の春、朝の底ん処。(S E) 遠くに祭りの喧噪。

一樹

でね、その外人さん、日本語話してるつもりだろうけど、片言にもなっていないから何言ってるのか分かんないのよ。

麻衣

なに人なの？

一樹

それも分かんない。インドとか中東とか、あっち系。

麻衣

一樹君、それでどうしてクレームだつて分かったの？

一樹

だつて、椅子指した後、自分の尻を（身振り手振り）こうやって、アウチ、アウチって。そうかそうか、椅子が小さくて尻が痛いって事ねって、そんな感じ。

麻衣

ふ〜ん。

一樹

あと、テーブルの上で、（身振り手振り）こんなやって、こんなやって、花くらい飾っとけよって言うてる訳さ。

麻衣

なにそれ、大きなお世話って感じじゃない。

一樹

そうなんだよ。けどその外人さん、日替わり食べた途端にニツコリ。だから俺言つてやったのよ。タイシユウシヨクドウハ、アジデ、シヨウブ〜って。

麻衣

通じないよね。

一樹

多分、全く。

亜矢子

（下手より、雑誌を持って登場）お早う。

麻衣

おはようございます。

亜矢子

あら、今日はデート？

一樹

いいえ、翔太も来ます。

亜矢子

何、三人で行くの？お祭り。

麻衣

佳純さんも誘って四人です。

亜矢子

佳純ちゃん？あつそつか。お祭りの日はここ休むのよね。

一樹

もしかして、お昼ここで？

亜矢子

と思つてたけど、いいいいいの、これ佳純ちゃんに見せられたら。

一樹

あ、例の雑誌？

亜矢子

うん。

佳純

(住居より)お早うございます。

亜矢子

佳純ちゃん、あの外人さんが持ってたのこれでしょう。やっぱり坂崎さんが書いた記事だったわよ。名前も出てた。

佳純

やっぱりそうなんだ。

麻衣

何ですか、それ？

一樹

さっき言った外人のお客、この雑誌を持ってて、坂崎さんが書いた記事を見てここに来たみたいなんだよ。

麻衣

そうなんだ。

佳純

(雑誌を手)これ、先月出たのね。

一樹

でも、ボツになったって言ってたのに。

亜矢子

坂崎さんから連絡は無かったんでしょう？

佳純

うん。

一樹

先月出てたのに、これ見て来てくれたのはあの外人クレーマーだけか。

亜矢子

そんな事はいいの。佳純ちゃん、これ後でしっかり読んでね。坂崎さんの熱い思いが伝わってくるから。

佳純

…うん。

翔太

（下手より登場。あまり元気ではない）ウッス、

麻衣

おはよう。

一樹

翔太これ、やっぱり坂崎さんが書いた記事だった。

翔太

ああ、あれ。

一樹

でもこれ先月号なんだよ。だから結局、これ見て来たお客はあの外人さん一人きりだったって事なんだよ。

翔太

（沈んで）世の中そんな甘くないって。

一樹

おい、これから祭りに行くのに、何ブルーになってんだよ。

翔太

リア充のお前に俺の気持ちは分からないよ。

一樹

分かってるつもりだけど。

翔太

分かる訳がない。

村木

（下手より、坂崎を引っ張って何言ってるの、入って入って、

亜矢子

坂崎さん、

坂崎

おはようございます。

村木

表に立ってるから声かけたら、いやこいで、なんて。

坂崎

……無沙汰してます。

村木

もう半年以上経つよね。

佳純

お元気でしたか。

坂崎

はい。

一樹

今、ちょうど(雑誌)これ見てたところなんですよ。

坂崎

あ、それ。すみません、連載に穴が空いたからって、私も知らない内に埋め草に使われちゃったみたいで。

佳純

そうだったんですか。

坂崎

申し訳ありません。

佳純

とんでもない。

坂崎

あの…反響とかは…(佳純の苦笑いを見て)ですよ。

佳純

いいんです。父さん喜ぶと思いますから。

坂崎

今日は、例の自費出版、本刷りの前のサンプルが届いたんで、それだけお渡ししようと思って。

村木

だったら堂々と入ればいいのに。

佳純

サンプル、

坂崎

ええ、遅くなつて申し訳ありません。(鞆から本を)これで問題なければ、このまま。「底ん処の物語」です。

本を覗き込む面々。

村木

お〜いいじゃん。

麻衣

表紙綺麗〜。

亜矢子

素敵ね。

一樹

いいね。

佳純

今、父さん呼んで来ますね。

須藤

(下手から)ごめんください。

佳純

はい、

須藤

あの、こちらに田代麻衣、お邪魔してませんでしょうか。

佳純

田代？（覗き込んでいた本から顔を上げる麻衣）あ、麻衣ちゃん、

麻衣

…弘庸さん。

須藤

麻衣…探したよ。

麻衣

…何で。

須藤

決まってるだろ、帰ってきて欲しいからだよ。

麻衣

…ここ、どうして分かったの。

須藤

君のお母さん、友達 いろんな人に尋ねて、興信所も使った。

麻衣

…じゃあ、私がどこで働いていたかも…。

須藤

知ってる。

麻衣

だったら、

須藤 僕が悪かったんだ。君をちゃんと守れなかった。

麻衣 ……今更、今更そんな事…。

須藤 離れて初めて分かったんだ。僕にとって、君がどんなに大切かって。

麻衣 ……私は、嫁失格って言われた女だもん。

須藤 僕の奥さんは、やっぱり麻衣しか考えられない。

麻衣 ……お義母さんは、そうは思わないよ。

須藤 もう母さんには何も言わせないし、麻衣が望むなら、同居しなくてもいい。

麻衣 ……私は、

須藤 帰って来て欲しいんだ。

麻衣 ……あの家に、私の居場所…。

須藤 尊（たける）の母親は、麻衣しかいないだろ。

麻衣

…。

亜矢子

麻衣ちゃん。(振り向く麻衣に優しく頷く)

須藤

麻衣、

麻衣

…お義母さんとは、同居して、もつといっぱい勉強させて貰うから。

須藤

ありがとう。

一樹

良かった。良かったな、麻衣ちゃん。

翔太

一樹…。

麻衣

一樹君、

一樹

うん。良かった。

麻衣

…お祭り、ごめんね。

一樹

早く、行きなよ。

麻衣 皆さん、お世話になりました。

会釈して出て行く麻衣と須藤。

一同 ∴。(一樹を見る)

一樹 いや〜良かった。本当に良かった。落ち着くべきところに落ち着いたよね。
うん。

佳純 一樹君、

一樹 ∴何ですか？

佳純 元気出してね。

一樹 俺、元気ですよ。

村木 あのない一樹、

一樹 何すか、俺落ち込んでないすよ。

翔太 嘘つけ。メチャクチャ落ち込んでるよ。

一樹

落ち込んでなんかいられないんだよ。女の子に振られても、馬鹿な友達の面倒はみなきゃなんないんだから。

翔太

何だよそれ。

一樹

…お前、眼科で調べたんだろ。

翔太

え、

一樹

社長に聞いたんだよ。

翔太

…。

一樹

色弱、今まで気づかなかったって、どんだけ暢気なんだよ。

翔太

すごい軽度なんだよ。普通の生活には何の支障も無いって。だけど、色合わせは無理なんだよ。

一樹

それで板金工、辞めようってか。

翔太

…。

一樹

それじゃあ困るんだよ。俺は、翔太が作る工場で、好き勝手に働くって、気楽な人生設計立ててるんだから。

翔太

…一樹。

一樹

いつも二人でやって来たんだから、色合わせは、俺が担当すればいいじゃん。

翔太

…ありがとう、一樹。

一同が二人に注目し、ホッコリとした空気が流れる。(S E)電話が鳴り、佳純が出る。

佳純

はい、定食屋、底ん処です。はい、はい…エシユロン？テレビ…ゴメンなさい、ちよつと良く分からないんですけど…はい…え、来月の予約ですか。勿論、大丈夫ですけど…そうですか、よろしくお願いします。

亜矢子

何だったの、今の電話？

佳純

問い合わせ？今から来月の予約が出来るかって。

亜矢子

予約、

村木

しかも来月の、

佳純

いたずらよ。大丈夫ですって言ったら、じゃあ予定調整してまたかけます
って。

村木

何だそれ。

佳純

(坂崎に) 父さん呼んで来ます。

坂崎

すみません。

(佳純、住居に)

翔太

この店に予約、ちよつと笑えるな。

村木

俺達も明日の昼飯から予約するか。

一樹

ふざけ過ぎだよ。

隆三

(エプロンを手にも、住居より。佳純も続いて) 坂崎さん。

坂崎

ご無沙汰しています。

隆三 元気そうだね。

坂崎 ありがとうございます。今日は、本の出来上がりサンプルをお持ちしました。これなんです。(本を渡す)

隆三 (手に取り暫く眺め) あんたは、いつも仕事が丁寧だね。

坂崎 これは、私が作った訳じゃ、

隆三 責任感があるって事だよ。

坂崎 いえ、

隆三 …これ(エプロン)もう使って貰えないよね。

坂崎 …ご主人…本当は私も、またこの店の厨房に立ちたいです…でも、今私が入っても、余計な荷物が増えるだけですから…。

佳純 …坂崎さん、

隆三 分かったよ。蒸し返してすまなかったな。

坂崎

そうじゃないんです。ご主人、私、本格的に調理を学んでみようかなって
思ってるんです。

隆三

え、

坂崎

ですから、少し待って貰えたら外で修行して…それで、もし…佳純さんが、
良かったら、

佳純

え、

驚いて坂崎を見る佳純。下手より声。三平が飛び込んでくる。

三平

おいしい、テレビ、テレビ、

一樹

三平さん、

三平

テテテ、テレビつけて、

佳純

え、

以知子

(下手より)テレビつけて、

佳純

何、何があつたの？

以知子

いいからテレビつけて、

佳純

ちよつと待つてよ。(のぞき窓の下からリモコンを出し)

三平

昼ワイド、昼ワイド、

佳純

何よ、いったい。

佳純がリモコンでテレビの電源を入れ。一同が注目する。

女子アナ

(SE)確かに今年のランキングは、和食の店が増えている傾向にあります
が、この定食屋さんのランキングに関しては異例中の異例と言えますね。

佳純

何これ？

三平

(静かに)シー、

男性アナ

(SE)しかも最高ランクの三つ星ですからね。過疎の町、急行も止まらない
駅のロータリーに面した、本当に小さな定食屋さん「底ん処」が、快拳
中の快拳です。

亜矢子

底ん処って、

男性アナ

元々は、ある週刊誌の記事にエシユランのスタッフが注目したところから始まった話なんです。

佳純

坂崎さん、

坂崎

は、はい。

女子アナ

今回はこの筆頭審査員のロマンスキー氏が直々に審査されたんですよね。

一樹

あ、あの外人さんだ、

男性アナ

実は覆面審査の際、アクシデントで、同行する予定だった日本人の審査員が不在だったんです。その為、通常は会計を済ませた後になされるお店への審査通知がされなかったんです。

佳純

あれ覆面審査だったの、

女子アナ

という事は、お店はまだ受賞はおろか、審査された事実も知らないという事ですよね。

男子アナ

そうなんです。

三平

今知りました。

男子アナ

そこでこれもまた異例中の異例なんですが、今回は番組の企画で、いきなりお店に取材依頼をして、同時に受賞をお伝えする事になったんです。

佳純

え、それって、

以知子

どういう事？

亜矢子

どういう事なの？

女子アナ

今カメラ、中継の映像に切り替わりました。

一樹

あ、駅前だ。

亜矢子

え、これ今なの？

以知子

今よ、今今、

女子アナ

本当に、懐かしただすまいの小さなお店です。

翔太

あゝこの店が映った。

三平

親父さんのチャリだ。

村木

（下手の入り口を指し）あゝ立ってる。

男性アナ

明日からは、その店先に長い行列が出来るのは間違いないですね。

佳純

え、

女子アナ

はい。では、早速中に入ってみましょう。

佳純

どうしよう、どうしよう、父さん、

隆三

どうしようって、坂崎さん、

坂崎

とりあえず、（エプロンを受け取り腰に来ながら）挨拶を明るく、笑顔で丁寧、

三平

え、丁寧につて、

以知子

丁寧につて、

(下手の戸が開く)

一同

(下手入り口に向かって頭を下げ、叫ぶ) 底ん処を、よろしく。

— 幕 —

本作品の一部または全部を、無断複製、引用、改定することは、
いかなる形であれこれを禁じます。また著者に無断での公演もできません。